

V 考 察

1 廻間式土器

濃尾平野低地帯における古墳時代初頭の土器様式を、あらたに廻間式土器として設定する。廻間遺跡では1～8期の区分を設け、これを踏まえて廻間式土器をⅠ式～Ⅲ式、さらに各々を4段階に区分する。

1) 濃尾平野の土器編年について

愛知県を中心とする弥生時代から古墳時代にいたる土器編年については、すでに多くの大参編年 論考が用意されている。その内で特に注目されるものとしては1968年3月に大参義一が発表した「弥生時代から土師器へ」¹⁾であろう。その内容は、1. 山中・欠山・元屋敷・石塚期という編年案を確立し、元屋敷期をもって古墳時代前期の土器とした。2. 「広口壺形土器」を基軸にした器種分類を提示し、S字甕の出現を基本的には元屋敷期の段階と想定した²⁾。以上の視点はその後の土器研究へと踏襲され、大幅な修正はほとんどなされていないのである。ところがこうした視点に大きな問題が含まれていたことがしだいに明らかとなってゆく。第1の視点に関しては、その設定根拠となった基準資料自体への懐疑である。元屋敷遺跡竪穴状遺構を標式とする「一括資料」への批判が紅村・加納等³⁾により発表され、同時に採集資料を基に設定された石塚期にも「器種構成にどうも混乱がある」という指摘がなされた。また欠山式土器が、欠山遺跡第Ⅱ貝塚出土品を標式とする限り、そこには東三河地域の土器様相が示されているだけであるという地域色の問題が残る。愛知県内を単一の土器様式圏と見なしえるかどうかは、まず濃尾平野における様式設定が前提として存在しなければならない。第2の視点としては、器種分類の基準が量的比率において最も多い甕を疎外視し、壺・小型品を中心に行われる傾向が強い。またS字甕＝古墳時代＝元屋敷期とした見方は東日本の古墳時代研究に過大な影響をあたえ、特に東国の古式土師器・古墳造営の年代観に必要以上に新しい年代観を想定する気風を作り上げてしまった点は免れない所である。また欠山期はその後、飯尾・杉浦⁴⁾の古新の細分に発展し、特徴的な形で欠山期 ある高杯を中心とする分類へと発展し、そのことが分離しえない様式？としての「欠山式土器」の絶対的な定着へとつながってゆく。以上の先学の研究を踏まえつつ、ここでは以下の視点を重視し、問題を整理してゆくことにする。

1. 「欠山式土器」の再検討。2. 甕・高杯を器種変遷の基軸にする。この両者で3・4世紀の濃尾平野の土器の8割を占める。3. 濃尾平野における土器様式を設定する。

2) 土器に関する覚書

土器について考えて行く場合、まずあらゆる個性を持つ全ての土器群から、より高度に抽象化された、概念化された形式・型式が導き出されることが多いようである。これらの型式の設定作業において必ず見い出されるのは、そこに至る概念化でふりい落とされる異形・異質なカタチの存在である。こうして一旦排除されたこの種の土器がその後「報告書」の中でどのように取扱いされてゆくかは不明瞭な場合が多い。報告書の中では整然と整理された型式の群が型にはまった歴史を語りはじめ、そこには一点の曇りも例外も存在しない。人間の行為は単純化され、必然性の呪縛の中で整然と変化してゆく過程のみが語られることが多いようである。

ところで「機能が形態を決定する」⁵⁾という視点が存在する。しかしそれには批判も認められる。カタチの中には用途により分解しえない部分が存在する。また土器そのものは一つの完結した存在である以上、その使用、置き方に一定の規則性が見い出されようとも、一般にこれらとは無関係に存在することができるものである。機能を越えたある種の空間が必ずや土器の中には存在すると考えられる。

機能を越えたもの

機能に傾倒する「形式」とは以上の視点を一旦排除し、カタチ（形態）それ自身の中にすでに使い方（機能）が含まれるとし、「首尾一貫した表現形式」⁶⁾をとることで、模範的な型（範型）を作りあげ、個人はこの型から独立しえないと考える。なるほどデザインは生活する目的にしたがい基本的には社会的な価値判断により決定されることが多い。社会的とはまさに一定の規則、行動様式や考え方の基準（集団成員の大多数により支持され、あるいは保持されている）であろう。しかし一方デザインは偶然的要素が混入されることもある。それは社会性から遊離している場合、次第に消失し、社会的な淘汰が行われるとしても、我々が取り扱う一つの関係として取り上げられた一群の土器等の中には、時に抽象化された概念から大きくズレるモノ、あるいは部分が存在しているのである。なぜならば我々が取り扱う「形式・型式」というカタチとしての関係自体が一定であることはまれであるからであり、それはむしろたえず変動していると理解した方がよいからである。このたえない変動（あらゆる部分の変化）の集合体が一つの土器・土器群である。型式の変化を見通すにはこうした抽象化する以前の不安定な関係の中に位置するカタチにたえず立ち返りつつ考察を進める必要がある。

偶然的要素

変動の集合体

社会性に裏打ちされた機能の立場よりも、むしろ一定の社会的関係の中に位置づけながらも一つの独立した存在である製作者とその造形に視点をおきたいものである。そこには具体的な道具（身体の延長）それを使用する手法、これらを統合し適度に調整する仕組であるカン・コツが重要な働きをする。こうしたカタチに内在する全体的な変動システムである手順を基準に置きつつ以下土器について考えてみることにする。

手順

共同体内部での土器製作の体得は「見よう見真似」という手段の中で進行してゆくのであり、そこに厳格な規則など存在しないのである。ただ構成員に共有されている「一定の方向性・関係」が存在し、それは土器群に見られる気風・作風に近いものと考えられる。

志向 これを今、「志向」と呼びかえることができる。具体的には当地域には高杯・壺を問わず認められる形態の内彎志向がその代表的なものである。これらの現象は明らかに単一の機能に還元できるものではなく、全体のバランス・流行というものに近い。様式を「同時代性を前提とした型式群」⁷⁾の総体とすれば、むしろ志向としたカタチから醸し出される気風のようなものが重視されてよいのではなかろうか。このあいまいな全体性が様式を決定する場合が多いように思われる。

人間の製作行為には2つの次元があると考えられている。一つはフォームを見つけ出すことであり、それは人間の創造的行為そのものである。今一つはこの考え出されたものに現実の大きさやカタチを与え、それを製作するための材料を決定することである⁸⁾。デザインとは普通後者の意味をもつ場合が多い。考古学の場合取り扱う「形式」とはどうも前者をイメージしつつ現実にはある程度の妥協の中でまとめられることが多いように思われる。たしかに前者には歴史を見通すために必要とされる「普遍性」が内在する。ところが一方後者であるデザインの視点もやはり重要といわざるをえない。道具を使って具体的に土器を作る、その過程こそ変化と普遍性が混在する空間といえるのであり、型式を決定する場合、避けては通れない視点と考える。道具の使用とその具体的製作工程、その全体を総括する製作手順。カタチの丸味・鋭利・調整等の考え方は全て道具とその使用方法（手順）に還元できる。デザインを分類する手掛りを手順に求めることができる。以上のようなデザインにおける共通性を型式と呼んでよいのではなかろうか。するとデザインに見られる共通性としての型式、そして同時代性の型式群に見られる志向性が一つの様式を決定すると総合できる。

土器・土器群は本来変動する限り、変化を見通す要素が明確に位置づけられた分類を実施しなければならないはずである。しかしこれはかなり困難な問題である。一つの形式・型式の決定は、その次の瞬間他を排斥したものであることが多いからである。であるからこそ逆に志向・手順という全体的な視点が重要となる。

文明の趨勢の論理

「モチーフはその後の世紀の中で力を集め拡がり、成熟し、洗練されて最後にそのモチーフが本質を表現してきた文明から別れてしまう。こうなるとその文明は死滅して別の文明が別の場所か、又は同じ土壌から成立してくる。」⁹⁾この文明の趨勢の論理はそのまま型式・様式の変化にあてはまるであろう。「力を集め、拡がり」とは新しいフォームを見つけ出し、デザインが決定されること。すなわち製作手順が決まり一つの方向性を持つことである。「成熟・洗練」とは手順の合理化が進むことであり、そしてやがてもうこれ以上手順の合理化・組替が不可能な段階に達した時、つまり一つの手順の省略がすなわちカタチの消失に直結するほどに進行した時に新しいカタチを求めて、歴史はあらたな方向に動き出すのである。

一つの歴史の方向性・志向性はいかに作られて行くか、そのメカニズムは以前として不明瞭ではある。この点は第2節で若干言及することになる。

3) 分 類

形状と技法を主要な要素として土器を分類する。廻間遺跡ではこの作業を進める上で2つの資料的制約が認められる。一つは全体の形状が復原できる。あるいは推定できる資料の数が少ない点。したがって口縁部・口頸部の形状とその特徴を基本的な要素として土器の分類を実施した。2つめには量的な問題である。定量的な分析結果を分類作業に加味しえたのは甕・高杯類ぐらいであり、他はきわめて不安定である。一見して分類することが可能な要素こそむしろ重視される必要があり、そこには製作者がこの種の形に特に強調したい意図が存在しているはずである。それは本来的に全て機能に基づいて編み出されたものであったのかは不明瞭である。いずれにしろ他と区別される要素・他の形との差異性が明確な特徴を分類の基準にする必要がある。その意味からして口縁部・口頸部の区分における直口・内彎・外反・外傾は成形・整形・調整段階を通じて一貫して保たねばならない形状の特色として位置づけられるのであり、決定的な分類要素と考えてよいものと思われる。またその形状の変化も他の部位と比べて過敏であるという点は周知のごとくであろう。

分類要素

壺・甕類とする機能的分類の細分要因を口縁部・口頸部に求める。なお大型・小型品については本来明確な分類基準を作る必要があろうが、ここでは特に必要と考えるもの（編年を考える上で）のみを対象とした。分類の最下位枠についてはきわめて恣意的となる。

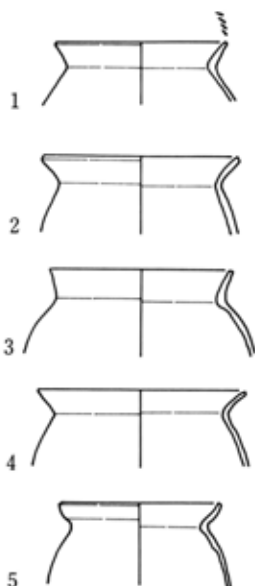
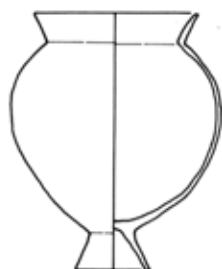
外来系・在地系土器について。遺跡から出土する器種に関しては、これを3つの群に区分する考え方が提示されている¹⁰⁾。在地性・外来性そして新出性土器群。新出性については他の2者と少し分類基準が異なるように思われる。在地性・外来性はその系譜に主要な視点が置かれている区分であるとすれば、新出性は加えて広範囲な「斉一性」社会的背景を内包させようとする戦略的な区分であるように見うけられる。また一方「搬入品」についても胎土分析を含め、製作技法との関係もその研究対象とする場合が多いため、その資料の位置づけが不安定となる事が多いようである。そこで小論では以下のような基準を一応設けておくことにしたい。

外来系土器

土器の形に見られる形態の特色の系譜を第1の基準に置く。これにより外来系土器と在来系の2つに大きく大別できる。在来系とは前様式から系統的に、あるいはそれを基盤に創出された土器群と言う事になろう。その後前者（外来系）は対象とする土器そのものが単発的に他の地域から持ち込まれたもの、その可能性が高いものを搬入品として取り扱い、これらをモデルにして在地で製作された場合を模倣品と総括する¹¹⁾。また他の地域に系譜を置くものの、その後独特な、独自の解釈の基に受容され広くその地に定着した土器については受容された土器（受容土器）としておく。受容土器は一般的にその地域で独自の変化と独自の系譜をその後に辿れる場合が多いようである。また受容土器は受容した側の意図が強く働いた土器としてその選択性と新解釈が研究の対象とならねばならない。外来系の中に分類上は位置づけられるものの、その土器群そのものはむしろ在来系土器と同様に取り扱う必要がある。そこに系譜上の淵源地域と包摂的な関係を想定する事はほとんどないと考ええる。

受容された土器

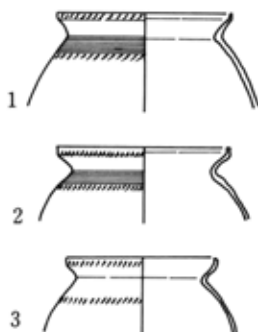
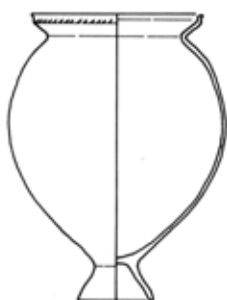
甕 A



〔甕 A〕 く字状口縁台付甕（く字甕）

- A₁ 口縁端部に刺突文を施すもの。口縁部は外傾する。
- A₂ 口縁部は大きく外傾し、口縁端部に明瞭な面をもつ。
- A₃ 口縁部は体部からほぼ垂直に立ち上がる直口口縁。端部に面をもつ。
- A₄ 口縁端部には明瞭な面をもたず、丸く調整する。口縁部は外傾・外反。
- A₅ 内彎口縁をもつもの。口縁部を強くヨコナデすることにより内彎させるものが多い。端部に面をもつ。

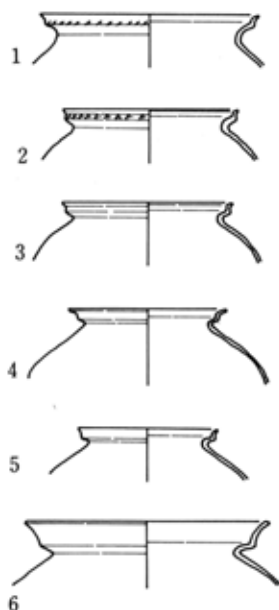
甕 B



〔甕 B〕 受口系口縁台付甕（受口系甕）

- B₁ 鋭く屈曲する口縁部をもつが、その手法ははねあげ口縁的である。
- B₂ 鋭く屈曲する口縁は、端部に明瞭な面をもつ。屈曲の位置を口縁端部に置くもの(a)と体部に近接するもの(b)と2種に細分できる。
- B₃ 内彎屈曲口縁をもつもの。屈曲に丸味をもたせ、端部には面をもつ。

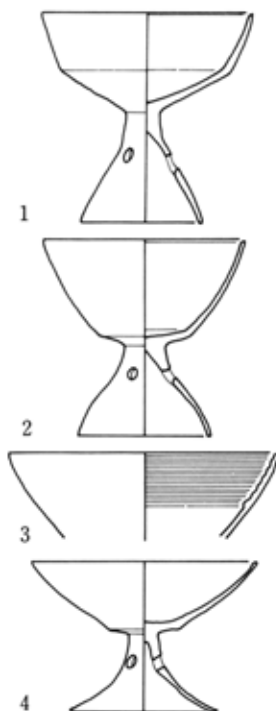
甕 C



〔甕 C〕 S字状口縁台付甕（S字甕）

- C₁ 口縁部の複雑な段構成は全体に外反し、刺突文を加える。（S字甕O類）
- C₂ 押引刺突文をもち、口縁第2段はほぼ垂直に立ち上がる。（S字甕A類）
- C₃ 口縁端部に明瞭な面をもつ。刺突文は省略する。（S字甕B類）
- C₄ 口縁部の複雑な屈曲は外方へ大きく拡張する。頸部調整技法をもつ。（S字甕C類）
- C₅ 口縁部の第2段が上方に拡張する中型・小型品。
- C₆ 山陰系口縁の特色をもつもの。大型品。

高杯A



〔高杯A〕杯部に段をもつ有段高杯

- A₁ 口径と稜径の差が小さく、杯部が比較的浅い。円柱状から円錐へ移行する脚部をもつ。
- A₂ 内彎杯・内彎脚をもつ高杯。口径と稜径の差が大きく、杯部が深い。
- A₃ 杯部内面に多条沈線文を施す。
- A₄ 円錐状の外反脚をもつもの。杯部は大きく外傾するものが多い。

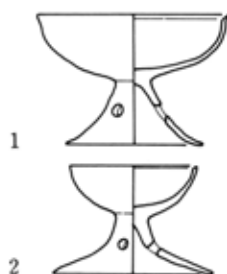
〔高杯B〕半球状の杯部をもつ碗形高杯

脚部は大きく外反する。大型（口径20～21cm）、中型（17・18cm）、小型（15cm未満）

- B₁ 口径が脚径を凌駕するもの。
- B₂ 口径が脚径よりも小さいもの。中型(a)と小型(b)に区分する。

〔高杯C〕有稜高杯を一括する。脚部は外反あるいは屈折を有する場合がある。

高杯B



高杯C



器台A



〔器台A〕円錐状の内彎脚をもつもの。

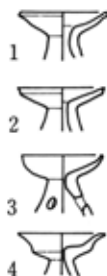
- A₁ 垂下・拡張口縁をもつもの。擬凹線文を施す。
- A₂ 口縁端部に面をもつ。中には沈線文を施すものも見られる。大・小型をもつ。

〔器台B〕口径11cm未満で、脚径が口径を凌駕する小型器台。

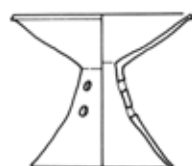
器台B



- B₁ 口縁部がやや彎曲し端部に面をもつ。脚部は屈折部をもち内彎・外傾。
- B₂ 口縁部は直線的で、大きく外反する脚部をもつ。
- B₃ 内彎する口縁部をもつ。
- B₄ 外反する有稜口縁をもつ。

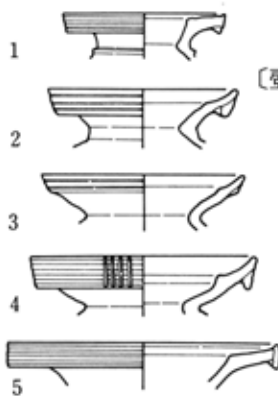
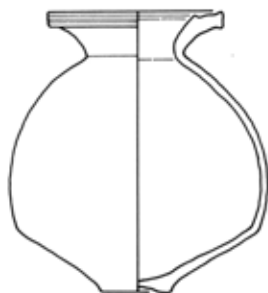


器台C



〔器台C〕外反する円錐状の脚部をもつもの。大型・小型をもつ。

壺A



〔壺A〕 垂下・拡張口縁部に擬凹線文を施し、各部に赤彩を施す加飾壺(パレス壺)

A₁ 口縁内面部の文様帯が平坦面を呈する。

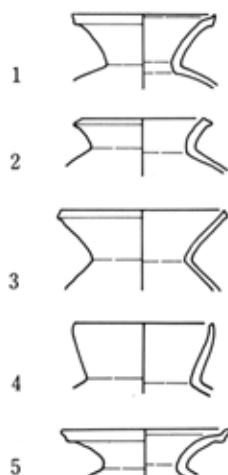
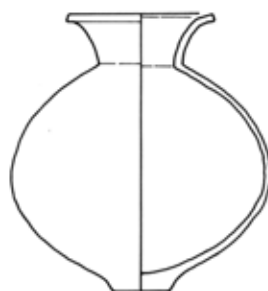
A₂ 口縁内面文様帯が内彎し、端部の垂下が著しい。

A₃ 口縁部の文様帯が有段状を呈する。

A₄ 口縁部が内彎しつつ端部に拡張口縁をもつもの。

A₅ 口縁内面が直線的に屈折するもの。

壺B



〔壺B〕 広口壺。比較的大型品が多い。

B₁ 口頸部が外反・長頸のもの。(広口長頸壺)

B₂ 口頸部が外反、短頸のもの。(広口短頸壺)

B₃ 口頸部が外傾。(広口直口壺)

B₄ 口頸部が内彎。(広口内彎壺)

B₅ 口縁部が有段状を呈するもの。

〔壺C〕 口頸部が内彎する中・小型内彎壺。

C₁ 大きく外方に広がる口頸部をもつ。(内彎長頸壺)

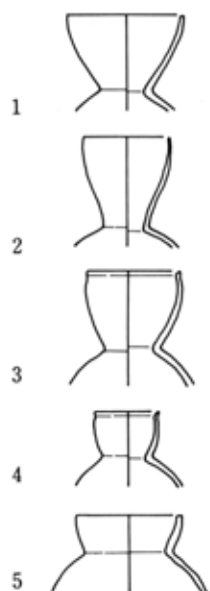
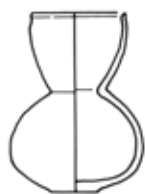
C₂ 細く長頸の口頸部をもつ。(内彎細頸壺)

C₃ 口縁部がやや複雑に変化、端部は、微妙に外反傾向。(長頸ヒサゴ壺)

C₄ C₃に比べ短頸のもの。体部が口頸部に比べ著しい大きい。(短頸ヒサゴ壺)

C₅ 内彎口頸部をもつ広口壺。(内彎広口壺)

壺C

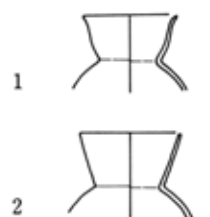


〔壺D〕 直口・外反する口頸部をもつ中・小型壺。

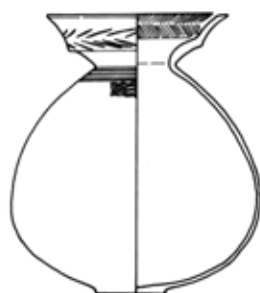
D₁ 流線的な外反する口縁部をもつもの。

D₂ 外傾・直口口頸部をもつもので、体部は球形を呈する。

壺D



壺 E



〔壺 E〕口縁が有段状を呈する加飾壺。(柳ヶ坪型壺)



E₁ 口縁部が有段状を呈するもの。

E₂ 二重口縁技法をもつもの。口縁部の製作が貼り付け状から積み上げ状に変化する。

壺 F



〔壺 F〕二重口縁壺

鉢 A



1



2



3



4

〔鉢 A〕比較的大きな鉢を総合する。

A₁ 口径が体部径を凌駕するもの。

A₂ 直線的に外傾する体部をもつ。

A₃ 受口系口縁をもつもの。

A₄ 口径が体部径と同時か、小さいもの。

A₅ 体部が比較的浅く、大きく開く口縁部をもつもの。大・小型をもつ。

A₆ 有孔鉢。

鉢 B



1



2



3

〔鉢 B〕小型の鉢を総合する。

B₁ 明瞭な口縁部を形作らないもの。比較的直線的なもの(a)と大きく彎曲するもの(b)がある。

B₂ 口径が体部径より小さいもの。

B₃ 口径が体部径を凌駕するもの。口縁部が比較的小さいもの(a)と大きいもの(b)がある。

B₄ 口径が体部径を著しく凌駕するものを一括する。精製品。

4) 技法と道具

土器に見られる細部の形状は、手法・技法に基づき実施された結果であると理解すれば、これらの細い形状の観察により具体的な手順とその手法・技法を類推することができる。ここでは文様を含めてまとめて概観しておこう。各々の形状分析は総体としてのまとまりある土器を分解することにおいて実施されるが、これら属性としての意味はあくまで総体に再び立ち返った時点において初めて有効性をもつものであり、属性のみに固執した分析法は基本的に何ら意味をもちえないと考える。属性分析を踏まえた上での綜合作業こそ主たる目的であらねばなるまい。

細部彎曲調整

口縁部 第27図 a～e が見られ、その内特に注目したいのは口縁部 b である。口縁端部には明瞭な面・斜面をもち、外面は微妙に外反する形状を見せる。このきわめて繊細な、特色的な端部調整を細部彎曲調整としておこう。細部彎曲調整は高杯・壺を中心に認められ、口縁部のみならず脚部にも使用される場合がある。受口系口縁¹²⁾と S 字状口縁の違いは口縁部が 2 段構成を原則としているか、3 段構成かにある。また器種の薄さ、調整法に明瞭な差が存在することは言うまでもない。

脚・台部 脚部・台部の接合面は第27図 a～d の 4 種が認められ、加えて S 字甕の台部製作技法が存在する。甕の台部に限定すると、a・b は台部の製作から体部まで順に粘土を積み上げて行く方法を用いて行われ、その後充填する。これに比べ d 及び S 字甕台部はまず台部を製作して、その後(倒立)改めて体部の製作に移行する手順をもつものである。c は前者の二帯技法と後者の倒立技法と両者が存在する移行期の技法である。さらに S 字甕台部はその製作手順に特異な手法が見い出されるのであり、この点においても受口系甕・く字甕の両者と大きく異なる。(後述) 台部及び脚部の製作も基本的には a→d に変化すると考えてよいであろう。

その他口縁部(特に壺)製作においては第27図のような技法が存在する。a は口縁端部に粘土を大きく貼り付け、垂下させ拡張させる垂下口縁技法と呼ばれるものである。時に垂下する粘土の隙間をさらに粘土で補充する場合も見られる。b は有段部を作り出すために貼り付け状に粘土を使用するもの。c は積み上げ状に粘土を置くもので、二重口縁壺や有段高杯によく見かける技法である。柳ヶ坪型壺の口頸部製作は b から c へと変化することが認められ(E₁～E₂へ)、また有段高杯の杯部製作にもこうした変化が内在している(A₁～A₂へ)。

〔技法と手法〕

技法と手法

ここでは技法と手法の基準を以下の視点に基づき使い分けることにしたい。手法とはある限定された道具を使用し施される単一の動作で、技法はこれら手法の組合わせによってまとめあげられた細部手順。したがって単発的・極部的な動作である手法と異なり、技法は一定の共通性とまとまりをもつより高次元な概念と位置づけられよう。

調整段階の手法としてはナデ・ミガキ・ハケメ・ケズリが代表的なものである。

ナ デ

a・b・c・dの4種が存在する。ナデaとは所謂ヨコナデとして一括されるもので、ナデ皮・布を用いた調整段階に用いられる手法。口縁部、脚・台部によく散見できる。ナデbは指ナデ手法を意味し、特に指頭による動作痕跡が器壁に明瞭な凹凸となって残る場合が多い。主に体部内面、整形段階に実施される。ナデcはナデ調整とされるもので、具体的な道具は推定できにくく、器壁の凹凸はほとんど見られない。ナデcは本来複数の手法により実施された調整技法として位置づけた方がよいものである。ナデdはヘラ状工具を用い局部的に施されるヘラナデ手法。

ミガキ

ミガキ

a・b・cの3種が見られる。ミガキaは比較的幅の狭い工具痕跡を留めるもの。ミガキbは逆に幅の広いミガキ痕が見られるもので、その動作は粗く器壁に凹凸が残る。ミガキcは著しく細いミガキ痕が丁寧に施されるもので、その動作はヨコ方向に限定できるものである。一部に回転力を積極的に利用したと推定されるものも見られる。

ハケメ

ハケメ

a・b・cの3種が見られる。ハケメaは所謂ハケメと一括されるもの。浅く細い条痕を残す。ハケメbはハケメ痕がほとんど認められないもので、工具の動作単位のみが目立つもの。通常a・bの差はハケメ工具の使用度に起因すると考えられることが多いようである。しかしハケメbは特に内面調整に多用されるのであり、ハケメaに比べむしろより平滑化に力点を置いた手法と位置づけた方がよい。ハケメcはS字麤特有のハケメ（クシ状）で、1cm単位あたりのハケメ密度が3～5本と粗い。器壁を整えると同時に搔壁作用にその特色を見い出すことができる。

ケズリ

ケズリ

a・bの2種が存在する。ケズリaは所謂ヘラケズリとして認識されているもの。成形後改めて行われる手法で、明瞭な乾燥という手順が伴う。ケズリbは搔壁手法で、ケズリaに比べると明確に乾燥段階が位置づけられていない。器壁には砂粒の動きが認められるものの同時に粘土の動きも存在する。

その他タタキ手法も一部に認められるも、廻間遺跡ではきわめて少なく、普遍的に用いられる手法としてはすでに消失した技術である。

〔技 法〕

特定の手順により組立てられた技法について、以下の4つの特色ある技法を照会しておきたい。これらは器種分類・小様式を設定するための有力な指標となる。

口縁端部細部彎曲調整技法

形状的には前述した口縁形状bとしたものである。端部は明瞭な面をもち、形状は内彎 細部彎曲のち外面のみ微妙な外反を伴う。あるいは内面をわずかに肥厚する。ミガキaにより調整される。壺・高杯に認められる技法である。壺は壺B₄（広口内彎壺）及び壺C類に広く採用され、高杯ではA・B・C類に多く散見できる。廻間2期（I式1段階）から明瞭に認められるようになり、4期（I式4段階）をもって終焉する。その後は端部に斜面を痕跡

的に残す形状へと変化してゆくようである。壺C_{3,4}（ヒサゴ壺）は特にこの調整技法から発展した形の口頸部が内彎し、端部においてやや広く外方へ彎月状を呈するやや複雑な形状となる。ヒサゴ口縁独特の形状を作り出している。

内彎脚調整技法

内彎脚の 特色

高杯Aの内彎脚部に見られる特異な調整技法と考えられる。その特色はまず端部を形状b（細部彎曲）によって構成し、内面の調整はハケメ後ヨコナデの手順により実施される。外面はタテ方向のミガキ後ヨコナデ。これらを組合わした脚部は内彎しながら脚端部がわずかに外彎し、器壁の厚さは端部に向かって薄くなる。こうした内彎脚調整技法の完成された姿(A)はその後まず内外面のヨコナデが欠損(B)し、やがて端部の器壁が厚くなり、細部彎曲が消失したもの(C)に変化する。(A)は廻間2・3(古)期（I式2・3段階）に多く見ることができ、(B)は続いて4期まで、(C)は4期から散見できる。

S字甕頸部調整技法

S字甕の 特徴的な 技法

S字甕B類新段階にすでに出現し、C類の登場に伴い確立し定着する技法である¹³⁾。体部から口縁部にいたる形状が著しく急激に外反する傾向に伴い、屈曲部（頸部）外面のみを調整する必要が生じ、生み出されてきた技法と考えられる。結果的に一条の沈線が頸部屈曲部に廻ることになる。

S字甕台部成形技法

S字甕台部の製作は必ず第27図に示したような形成技法に基づく。まず台部を成形し、その後倒立する。その際指頭圧痕を弧状に配して体部への粘土紐積み上げの取り掛りを作る。体部第1段（体部約 $\frac{1}{3}$ 弱）成形後粘土による補充を接合面内外に行う。この時使用する粘土には多量の砂粒を混合させるという特色が見られる。この原則は廻間式土器S字甕に普遍的に存在し、変化することはない。

〔道 具〕

道具は身体的な機能の延長とされるのであり、土器製作及び分類・編年作業にとってきわめて重要なものである。調整技法と施文具に限ってまとめておく。

貝殻はアサリ等の殻端部を使用（一部施文具用に加工）した施文具である¹⁴⁾。ハケメ（ハケメa）・板状工具（ハケメb）・S字甕用ハケメ（ハケメc）は主に整形・調整用に使われ、密度に差が見られる。ヘラ状工具はミガキ及びナデ（ナデd）に見られ、施文具として多用される。施文具としてのクシは、一応人為的に加工された歯を有するものとしてハケメと区別しておこう。

〔装 飾〕

刻文・貼付文・彩文と大きく3つに区分できる。（陰）刻文はさらに刺突文系と線描文系に大別できよう。

貼付文は粘土帯を貼り付けることにより装飾性をもたせるもので、浮文と凸帯文に大別できる。浮文は棒状と円形が存在し、他の刻文と組合わされる場合が多い。

彩文は赤色顔料（主にベンガラ）を塗布することによる文様で、ベタ塗りと描書に区別

される。ベタ塗りはある一定の範囲内を広く塗りつぶすもので、赤色が強調される。描書は線描文として直線文・波線文等が見られる。その他（逆）U字文がある。（図版47—1125）

〔装飾文様〕

各種の装飾を組合わせることにより、器種によっては一定の文様パターンが確立してしまう場合がある。

パレス文様 壺A（パレス壺）に認められるもので、その構成は体部上半に横線文と波線文を交互に複数回組合わせるもの。廻間2期（廻間I式1段階）に完成する文様パターン。

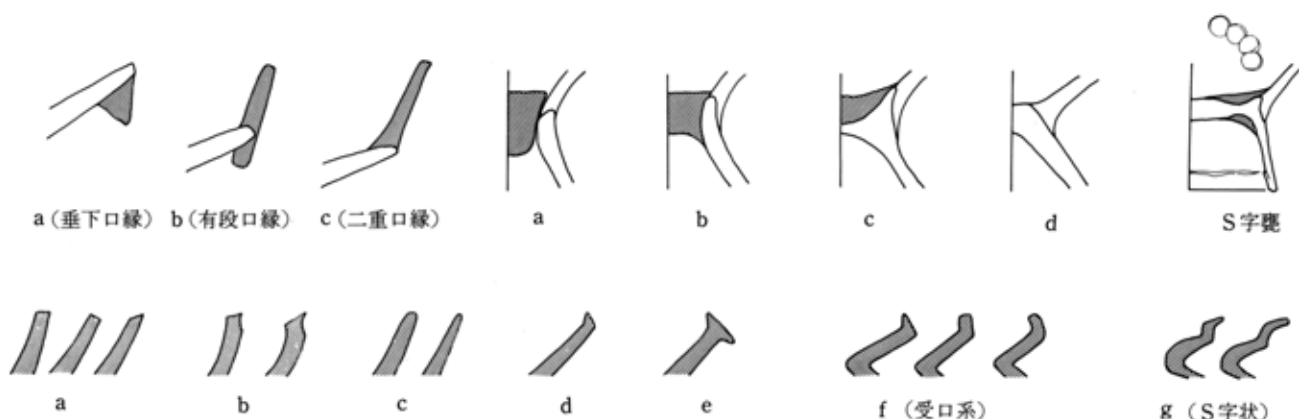
柳ヶ坪文様 壺E（柳ヶ坪型壺）の体部上半には必ず幅広い横線文と波状文がそれぞれ一単位施される。またその施し方がきわめて不明瞭で浅いという著しい特色が見られる。

受口文様 甕B（受口系甕）に用いられる文様で、口縁部に刺突文・体部上半に横線文とその下位に刺突文を組合わせる。

その他ヒサゴ壺（壺C_{2.3}）には口頸部を中心に連弧文を組合わせるものが多く、横線文を付加させるものもある¹⁵⁾。

第4表 文様分類

刺 突 文 系		線 描 文 系	
刺突文【ハケメ・クシ・貝殻】		沈線文【ヘラ】	
押引刺突文【ハケメ】		多条沈線文(5条以上)【ヘラ・クシ】	
(不連続)波線文【ハケメ・クシ・貝殻】		擬凹線文【ヘラ・クシ】	
連弧文【貝殻】		横線文【クシ】	
羽状文【ハケメ・クシ・貝殻・板】		波状文【クシ】	
竹管文(半截)【竹】		(クシ描)鋸歯文【クシ】	
列点文【ハケメ・クシ・板・棒】		(クシ描)孤帯文【クシ】	
		連弧文(単線・複線)【ヘラ】	
		波線文【ヘラ】	
		羽状文【ヘラ】	



第27図 技法と形状

5) 器 種

廻間遺跡から出土した土器を1～8期に区分する。1～8期の内容についてはまとめて次節で取り扱うこととし、ここでは各々の器形の変化とその特色を器種別に説明する。1～8期区分を前提とするが器種によってはそれぞれの時期の特色を明確に把握できないものも含まれている。また3期・5・6期はさらに古相と新相に区分が可能であり、その区分が見通されるものについては分離して説明を加えることになる。尚2～4期を廻間Ⅰ式、5・6期を廻間Ⅱ式、そして7・8期は廻間Ⅲ式期に所属することとなる。(後述)

〔甕〕

甕にはA・B・Cの大きく3つの器種が存在する。

く字甕 甕A (く字状口縁台付甕)

甕Aは体部から単純にく字状に屈曲する口縁部をもつ台付甕(以下く字甕)を総称した。

甕AはA₁・A₂・A₃・A₄・A₅の5つの形式が存在する。全形を推定できる資料は少なく、したがって主に口縁部の形状による区分となる。法量においても同様であり、大きさは第41図に示したように口径のみの比で推定した。

超大型は口径23cm以上、大型は23cm未満19.5cm以上、中型は19cm～15cmで小型は15cm未満から11cmまでとする。なお口径11cm未満の超小型品も存在する。

消 長

甕A₁・A₂は廻間式土器様式以前から系譜をたどる事ができる資料であり、同時に廻間Ⅰ期にはA₁・A₂のみが存在する。2期(廻間Ⅰ式Ⅰ段階)になるとA₃・A₄・A₅の各形式が一斉に登場し、さらに第41図から認められるように各形式単位で小型品が一定量存在するようになる。すなわち形式の多様化が出現し、一つの画期を想定することができよう。この点は廻間遺跡2期をもって廻間式土器の成立を考える一要因ともなる。次に出土量とその構成比率であるが(第40図)、甕A類はほぼ5期をもって激減し、ほとんどその姿が見られなくなるという著しい変化がある。総じて甕A類は廻間Ⅰ～4期、廻間式土器ではⅠ式期の所産と理解してよい。

1 期

甕の多様化

甕A₁とA₂で構成される。特に甕A₁は山中様式を代表する台付甕の特徴を良く残している。体部は球形を呈するという特色が見られ、外面調整はタテ方向のハケメで、内面は口縁部直下までケズリが施されることが一般的である。台部は比較的大きく、内外面ともにハケメ後明瞭なヨコナデを施すものが多い。台部製作はaあるいはbが主体を占める。

2 期

甕A₁・A₂に加えてあらたにA₃・A₄・A₅類が登場する。またそれぞれの小型品も参入し、甕はより多様化する。器種は最も豊富になる。出土量を問題にするとA₁とA₅が多く、続いてA₂・A₄、A₃は最も少量である。体部の形状は以前として球形を保ち、外面調整はハケメ

で、内面調整はケズリが主体を占め、他にハケメが散見できる。台部はやや内彎する形状のものが見られるようになる。接合面はa・bそしてcが若干認められるようになる。A₅の内彎口縁をもつ甕は1期にその萌芽的現象が見られる資料(図版12—147)があるものの、内彎口縁
甕これらは口縁部のみを強くヨコナデするに留まるものであり、内彎口縁甕の確立は2期をもっとと理解してよからう。

3 期

甕A₁~A₅まで存在し、量的にはA₄である明瞭な面をもたない形式が多くを占めるようになる。以降A₄が甕Aの主体となる。続いてA₄・A₁でA₂・A₃がこれに続く。特に直口して立ち上がる特徴的な口縁をもつA₃は3期以降に盛行する傾向を示す。刺突文を施すA₁は以前として認められるが、端面の幅が急速に狭くなる。特に3期新相から4期にかけてはほとんど面をもつことがなく甕A₄に刻目を施すような形に移行する。口縁部はより大きく、幅の広いものが散見できるようになり、体部は徐々に長胴化に向かう。台部は内彎するものと直線的なものに区分され、3期新相以降前者が主体となる。接合面はa技法が欠落し、b~dが見られる。調整技法は外面にハケメを施すことは変化ないが、内面ではケズリが減少しケズリb(搔壁)・ハケメb(板)が盛行しはじめる。頸部内面に口縁部接合痕跡を留める資料が目立つようになる。

4 期

甕A類は全て存続するが、量的には刺突文をもつA₁が激減し、その主体はA₄、続いてA₅・A₃・A₂となる。A₃は口縁部が大きく、垂直に立ち上がる。A₅は口縁部を強くヨコナデすることにより内彎し、時に有段状を呈するものもある。台部は小型化しほとんど内彎する。A₃・A₄を中心に、大きな口縁部に比較的小さい台部を作るという特色が見られる。内面調整は全体をケズリ手法によるものは消失し、ハケメb(板)が基本となる。

5 期

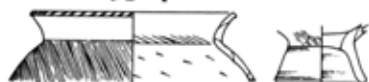
口縁部に刺突文を施すA₁は消失し、A₄の占める割合が甕A類の50%以上に達する。また小型品の占める割合も増加する。A₃は口縁部から体部にいたる形状が、ゆるやかな曲線を呈し屈折は認められない。体部の長胴化は進行し、外面調整はハケメからケズリb(搔壁)に変化する。

6 期

大型品はほとんど見られなくなり、A₄を中心とする小型品が残存する程度である。口縁部は大きく外傾するようになり、頸部径の比率が小さくなる。6期に所属する甕Aはわずかに残存という形をとり、廻間遺跡では基本的には5期をもって甕Aは一旦終焉を迎えると考えてよいであろう。甕Aの終
焉

廻間遺跡

甕A₁



甕A₂



甕A₃



甕A₄

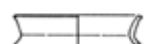
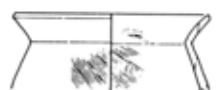


甕A₅

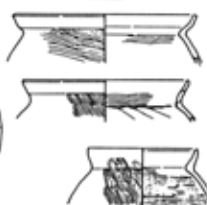
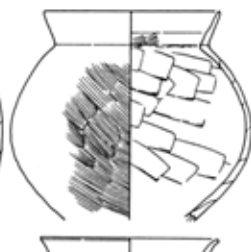
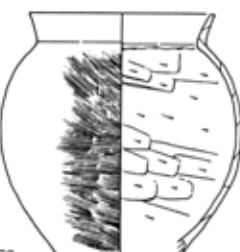
1



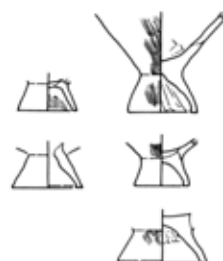
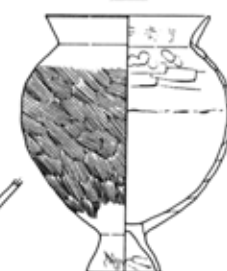
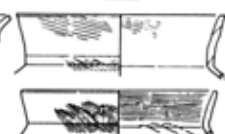
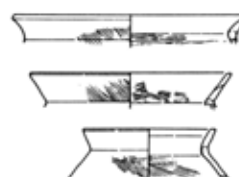
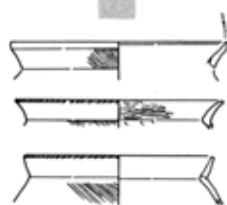
2



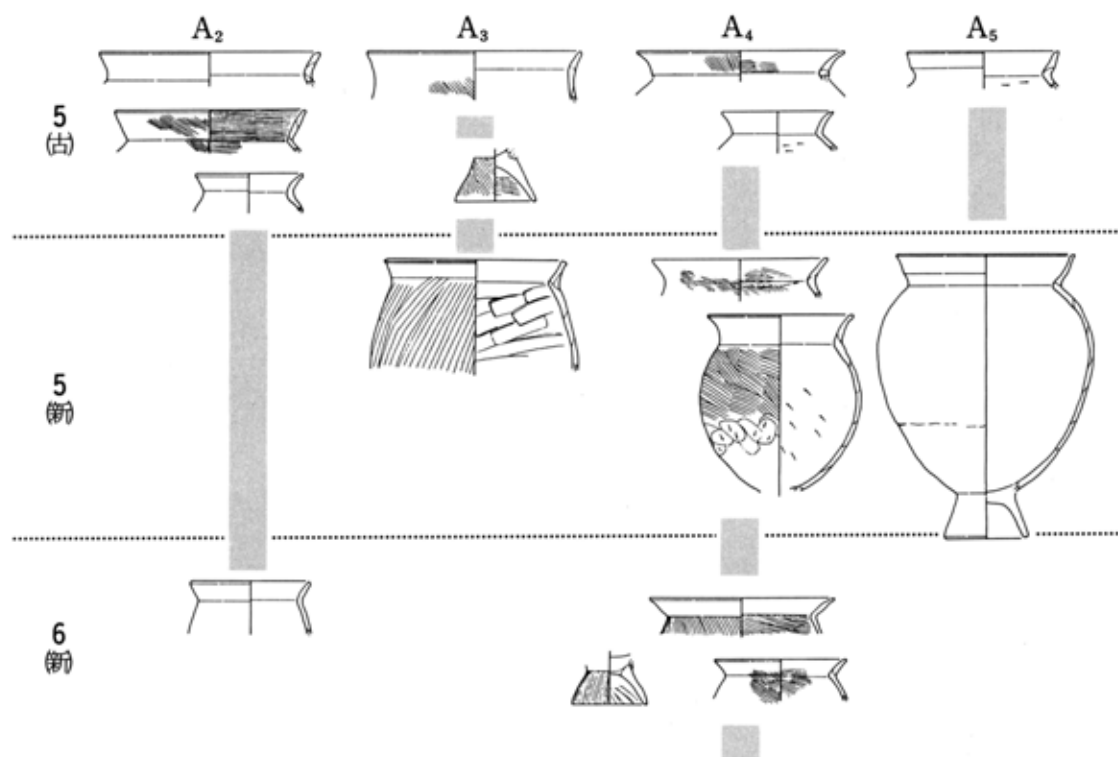
3



4



第28図 甕Aの変遷 (1 : 8)



甕B（受口系口縁台付甕）

受口系甕

受口状の口縁部をもつ台付甕であるが、所謂近江型甕とは形状が異なり、かつ変化の仕方に違いが認められるため受口系口縁と仮称しておく。（以下受口系甕）受口系甕は近江地方北部、特に湖北地域との類似性が指摘できようが、濃尾平野の場合その全てが台付甕であるのに比べ、湖北では平底甕を多く含み、系統的にまず整理する必要がある。受口系甕は外来系土器の内、新解釈を加えて定着した受容土器の範疇にはいる。山中様式後半から廻間Ⅰ式期を代表する、（むしろ主体となる）台付甕と位置づけてよいであろう。従来は全て近江系の系譜で処理されている場合が多いように思われるが、濃尾平野を中心として広く受容され、東海各地へ伝播し、それぞれの地域で再び新解釈が付け加えられてゆくタイプの甕であると再評価する必要がある¹⁶⁾。

受容土器

甕Bは $B_1 \cdot B_2 \cdot B_3$ の3類に区分できる。その内 B_2 はさらに端部の屈折が口縁部下位ではじまるものと(a)と口縁端部近くで屈折するもの(b)と2つに細分できる。廻間式土器では B_2b が甕Bを代表する形式であり主体を占める。

消 長

廻間式土器直前様式では甕B（受口系甕）が甕全体の中で多くの比率を占める形式として存在する。廻間遺跡では1期に $B_1 \cdot B_2$ が存在し B_3 類の有無は不明である。廻間2期になると $B_1 \sim B_3$ の全ての形式が確実に存在する。また小型品も同時に認められる。3期古相では B_1 と B_2a が早くもこの段階をもって終焉する。（廻間Ⅰ式2段階）その後3期新相では B_2b と B_3 類が主体となり、5期に一部残存するものの基本的には4期をもって全ての形式が

消失する。廻間Ⅰ式期前半に盛し、Ⅰ式期内で終焉する甕と考えることができよう。

なお受口系口縁部のみの破片では甕Bと鉢A₃の区分が困難であり、これらを厳密に分類していない。

2 期

甕B₁・B₂・B₃で構成される。B₂・B₃は受口部の立ち上がりが比較的長く、外面にはヨコハケあるいは横線文を施す。受口部外面の稜線には刺突文が細く施される。体部は球形の形状を残し、体部上半の肩部には横線文と刺突文を組合わす、受口文様が必ず施される。台部は甕Aに比べると器高が低く、低部径が広いという特色が見られ、接合部はaを主体とするもので、内面の充填の時粘土が下方に突出するものが多く見られる。甕Bの台部製作は以降こうした連続して積み上げる接合部a・bに固執する傾向が強い。その意味で甕A(く字甕)の台部とは形状とその変化に違いが認められ、台部のみの区分も可能である。

内面ハケメ 外面調整はハケメ(ヨコ方向が多い)、内面もハケメを多用する。

甕全体の出土量を問題にするとこの時期(廻間Ⅰ式1段階)最も多い甕が甕B(受口系甕)となり、一つの時期的な特色といえよう。(第40図)なおその内B₂類が7割を占める。

3 期

3期古相(Ⅰ式2段階)をもってB₁とB₂a類は終焉する。甕全体の比率は3期をもって甕A・C・Bの順に順位が定着する。2期から3期にかけて甕Bの減少が目立ち、特に3期新相より激減すると見てよい。口縁部における受口部の立ち上がりは縮少し、ヨコハケがほとんど見られず、刺突文を省略するものも表れる。口縁部の外傾角度は小さくなり3期新相では口縁部の刺突文は省略される傾向が強く、また刺突文の施文間隔も粗い。体部は長胴化し、肩部の文様は横線文が古相に残存するも、全体に文様の省略が著しい。

4 期

甕B₂b・B₃が見られるものの、B₃類以外文様はほとんど省略される。B₃は受口部の製作が内彎状となり、屈曲が見られない。口縁端部に認められた面取り、それによるわずかな外方への把厚という特色は姿を消す。4期をもって甕Bはほぼ終焉する。

S字甕 甕C(S字状口縁台付甕)

甕Cは廻間式土器を代表する器種であるS字状口縁台付甕(以下S字甕)で、C₁~C₆類に分類できる。S字甕の詳細な分類は後述(第2節)するためここでは形式変遷を中心にまとめておくことにする。ただ甕A・Bに比べ製作法・胎土において別種の台付甕である点を強調しておく必要がある。

大きさは甕A・Bと同様な区分を適応でき、C₅は中・小型品、C₆は大型品以上のものに限られるという偏りが見られる。

消 長

廻間2期をもって甕Cが出現し、C₁(O類)→C₂(A類)→C₃(B類)→C₄(C類)と変化する。A類の登場は廻間3期(Ⅰ式2段階)、B類5期(Ⅱ式1段階)、C類は7期(Ⅲ

式1段階)に出現、廻間I式期はS字甕O・A類、II式期をB類、III式期をC類を中心とする時代であると単純化することもできる。C₅・C₆類は7期から出現し、C類とともに生み出されてくる新形式と見てよい。量的比率では5期をもってS字甕が急増し、甕全体の9割を占めるにいたり、II式期を区切る最大の要因となる。甕の多様化(I式期)から画一化へ(II式期)、そしてS字甕自体の分化(III式期)へと変遷する。

2 期

S字甕O類が主体となり、甕全体の中で占める割合は2割で甕B・Aに比べ低い。

3 期

甕の比率では3割を超え、徐々に増加する傾向をもつ。S字甕O類とA類古段階が存在し、後者が主体となる。3期古相ではA類の外面調整は単斜方向のハケメが多く見られ、新相では単斜から放射状に変化してゆく、また内面調整ではハケメをナデ消し、頸部内面のハケメ調整のみを独立させようとする傾向が強い。

4 期

A類新段階のものに変化する。体部はまだ長胴であるが、外面調整は羽状ハケメに統一され、内面の最終調整手法をハケメからナデに置換するようになる。S字甕調整技法が完成する。

5 期

体部は長胴から球形へと変化し、しだいに肩部の張りが強調されるようになる。5期を **B類の登場** もってS字甕が他の甕類を圧してその主要形式となる。I式期では甕全体の比率の中で5割を大きく下回っていたものが、II式期になると突如7割に達し、やがて9割と、S字甕一色となる。

5期古相(II式1段階)はA類新段階が残存するも新相ではB類古段階の資料で占められるようになる。5期から台部の折り返しは明瞭化する。

6 期

体部の形状は球形から肩部の張りの強いB類中段階の特徴に変化する。体部上半のヨコハケは屈曲部から完全に遊離する。6期古相(II式3段階)ではB類中段階のものが多く見られるが、新相(4段階)になると口縁端部の面取りが不明瞭なB類新段階が混在する。

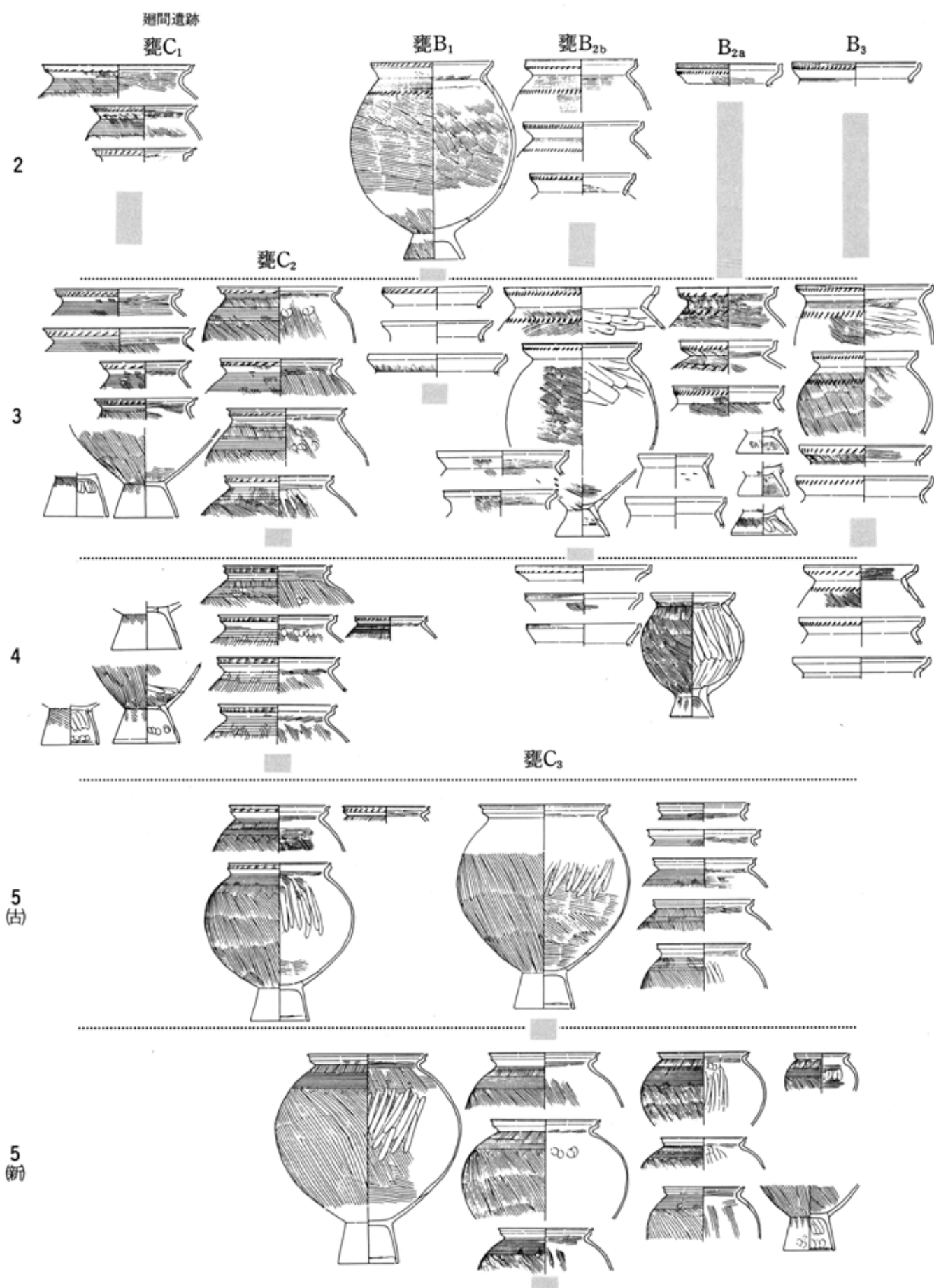
7 期

器種構成比率の中で甕の占める割合が、II式期では5割強であったものが、7期になる **C類の登場** と5割を割り込む結果となり、S字甕の減少傾向がIII式期の基調となる。また一方7期(III式1段階)はB類新段階の残存に加えあらたにC類古段階、C₅・C₆類が出現し、S字甕自体の分化が見られ一つの画期をなす。B類(25%)C類(52%)C₅(17%)C₆(3%)。

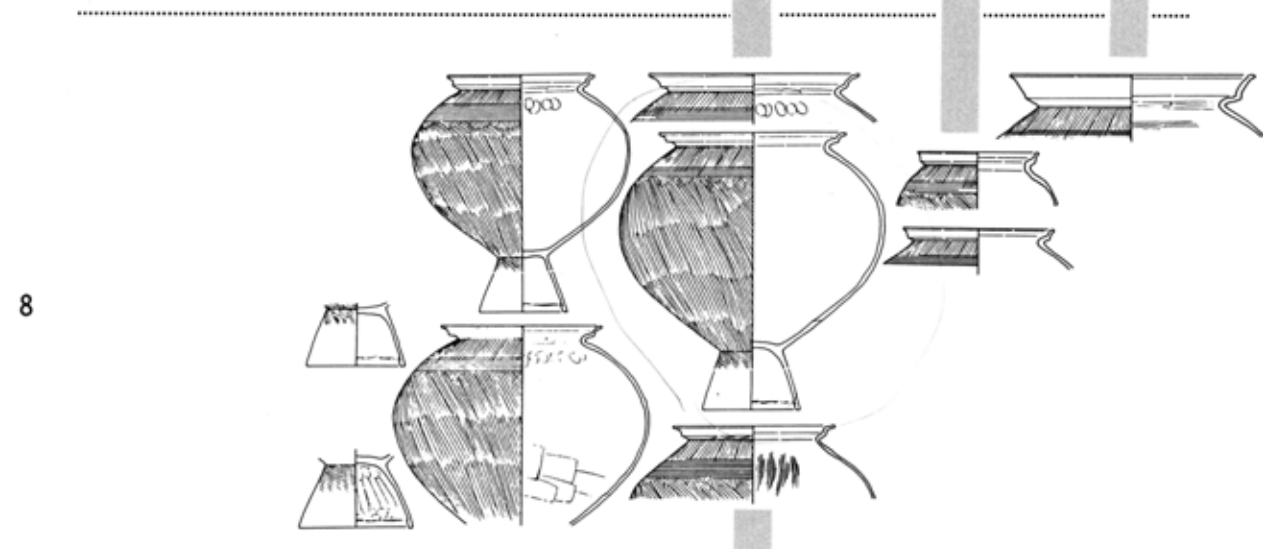
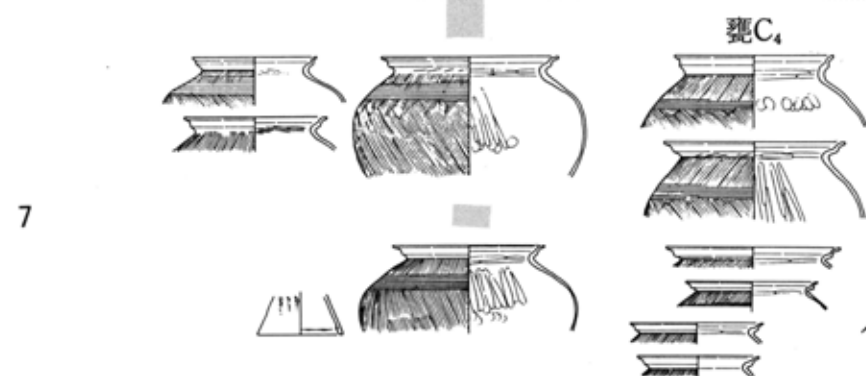
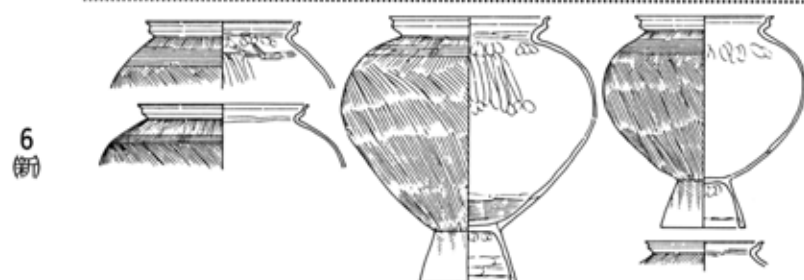
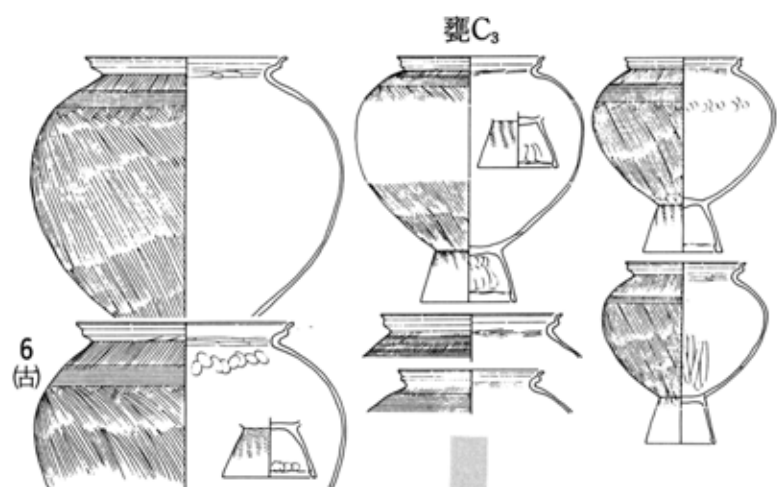
8 期

C₄(C類古段階)が86%とその主体を占めB類は消失、C₅・C₆類は合わせて1割強の比率に留まる。

廻間III式3段階以降は口縁端部が肥厚するC類新段階へと変化する。



第29図 甕B・Cの変遷 (1:8)



〔高 杯〕

高杯はA・B・Cの3つの器種が存在する。

高杯A

高杯Aは杯部が有段となる比較的大型の高杯と総称した。A₁・A₂・A₃・A₄の4類が存在する。A₁とA₂は廻間遺跡では同類として扱うが、本質的には別の系統的变化をもつ形式と理解した方がよい。(第38図)A₃は内面に多条沈線文を施すもの、A₄は内彎脚から脱却した円錐状の外反脚をもつ高杯である。口径はA₁～A₄まで大きな変化は見られず、25～23cmを中心とするものが多く、28～16cmの幅の中で特に目立った分布の偏りは認められない。

消 長

高杯A₁は廻間式土器様式以前に系譜を置くもので、廻間2期に残存するも、1期を中心に存在する形式である。A₂・A₄は廻間式土器様式を代表する形の高杯であり、A₂は2期から(廻間I式1段階)A₄は廻間6期に登場する。A₃は2期に遡る可能性は残すものの、3期古相から散見でき、3・4期と多条化が進行し、廻間6期をもって終焉する。

高杯Aの高杯全体に占める割合は、約75%前後と推定でき、最も基本的な形式とすることができる。また全器種での比率を見ると、6期までは甕に次ぐ量をもつ。しかし廻間式土器では漸次減少傾向が基本的な流れとして存在し、廻間III期にいたると、壺・器台の増加に伴い、量的較差が見られなくなる。

1 期

高杯A₁ 高杯A₁で占められる。A₁は変化の仕方により2類に細分できる。A_{1a}は杯部の深さを増加させる方向をもつ。A_{1b}はむしろ稜径を減少させようとする方向をもつ。脚部は柱状部から円錐状に内彎するものが多く、しだいに柱状部が減少する変化が1期の中で見られる。なお脚部に横線文を施す資料も散見できる。

2 期

高杯A₁は残在するも、高杯A₂が出現し主体を占めるにいたる。高杯A₂は基本的に高杯A₁bを母体として発展したものと考えられ、稜径の激減にその特色がある。高杯A₁とA₂の差異は、口径と稜径比の変化の方向に表れている。(第38図)その他脚部に見られる内彎脚調整技法(60頁)の出現がある。1期の高杯A₁の脚部端部は面をもつものが多く見られるのに比べて、2・3期古相の脚部にはこの内彎脚調整技法が主体となる。なお口縁端部の細部彎曲技法の明瞭化も2期の特色である。杯部は大きく(杯部高の増大)また脚部も同様に大きく円錐状の内彎脚が出現する。

3 期

高杯A₂はこの段階以降器高の縮少が基調となる。脚部に比べ杯部の深さが最も深くなる(比率的に)のは3期新相の特色である。以降杯部の深さが相対的に減少する。内彎脚調整技法は3期新相から不明瞭となる。

高杯A₃は2期に出現する可能性があるものの、基本的には3期をもって定着する。3期古相は、杯部と脚部の器高比がほぼ同様となり、A₃は3～5条の沈線文が施される程度に

留まる。新相になると、杯部が脚部の器高を凌駕し、脚部の内彎脚調整技法はヨコナデが省略される。A₃は幅広く施文する多条沈線文に変化する。

4 期

高杯A₂は内彎脚が崩れはじめる段階である。2つの方向が見られる。一つは脚部全体の器高を低化されるもので、内彎が圧縮された形状を呈する。今一つは大きく彎月状の脚部が端部付近の彎曲のみに留まるもの、あるいは直線化を志向するものが見られる。脚部の横線文は4期をもってほとんど見られなくなる。4期のものは無文帯が存在せず連続的な横線文が多い。脚部外面調整にナナメ方向のミガキが認められるようになる。杯部は大きく外傾する形状のものが主体を占める。A₃は多条化が進行し、その文様帯は器壁の厚さを増加させ段を有する。5期になると文様帯は粘土の貼り付けによる段製作へと手順が変化する。

5 期

高杯A₂は杯部がより強く外傾し、脚部の内彎も一段と圧縮される。また大きく開く円錐形に変化する。4期まで続いた口縁部の細部彎曲調整は消失し、明瞭な斜面をもつものになる。A₃は小型品が出現し、(5期新相)内面の文様には多条沈線文に加え波線文が組合わされる。

5期新相をもって杯部の内彎志向は崩壊し、内彎を留意するものと、直線化を志向するものの2つの形が見られるようになる。以下この2方向が高杯A₄にも受けつがれてゆく。

6 期

高杯A₂は稜径が著しく縮少し、大きく外傾する杯部をもつ。脚部の内彎はわずかな痕跡 高杯A₄。程度となる。高杯A₄が出現し、しだいにA₂形式と置換し、その主体を占めるようになる。A₃は小型品が多く、多条沈線文が施される文様帯は段構成が消失、線描による区分に変化する。

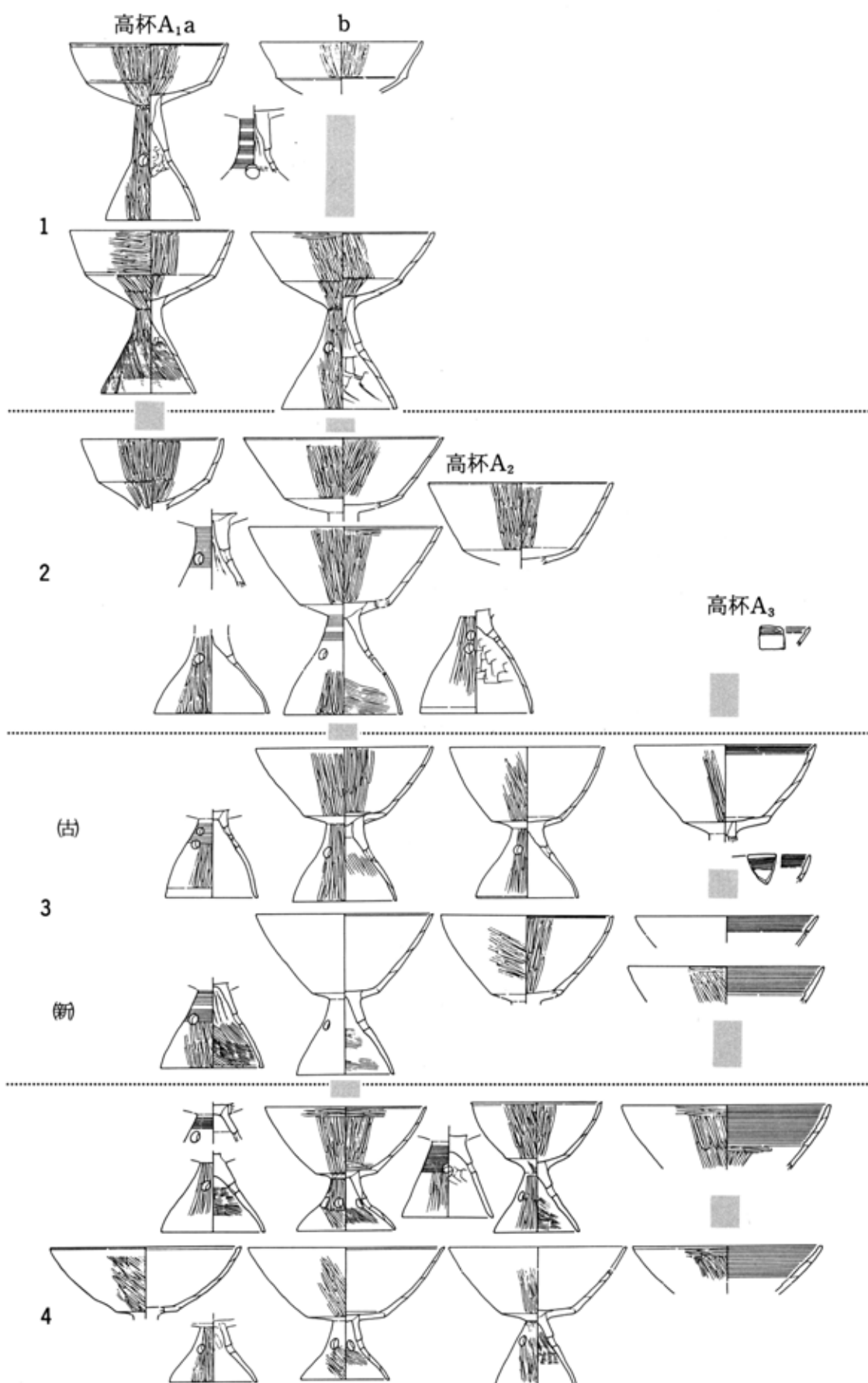
6期新相になるとA₂が終焉し、高杯AはA₄形式にほぼ統合される。脚部は高く、わずかな屈折部を有するものが多く見られる。透孔はしだいにその穿孔数が増加し、同時に穿孔方法も多様化する。

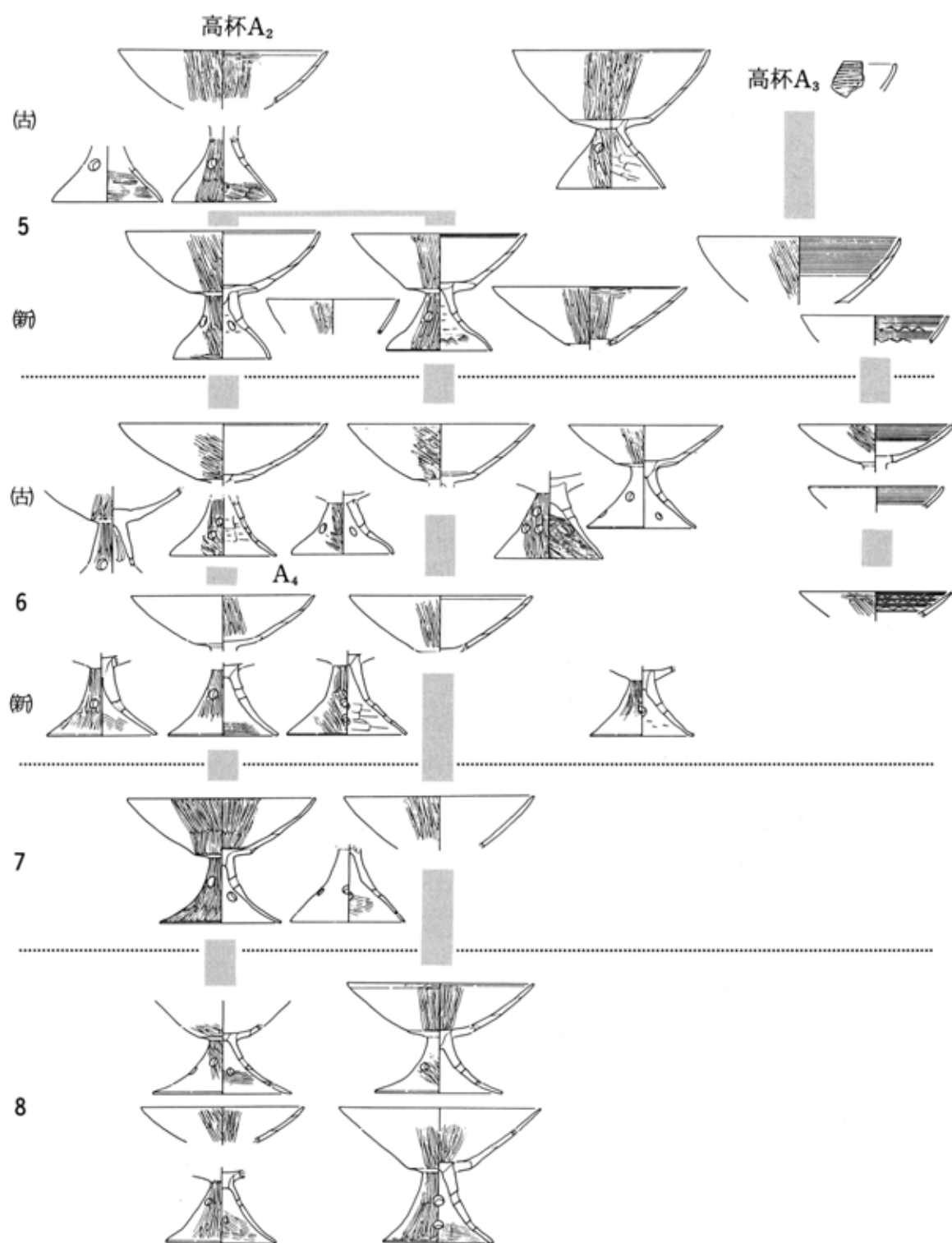
7 期

高杯A₄の口縁端部の斜面痕跡は、ほとんど欠損する。脚部はやや柱状を残しつつ、大きく外彎状に開口する形が多い。器壁が薄くなり、精製化する。

8 期

脚部は杯との接合点からただちに大きく外反する形に変化する。器高はますます小さくなり、杯部の深さも減少傾向を示す。器種構成における高杯の比率が相対的に減少し、A₄は急速に見られなくなる。





第30図 高杯Aの変遷（1：8）

高杯B

椀形高杯 高杯Bは半球状の杯部をもち、大きく外反する脚部を有する椀形高杯である。

口径が脚径を凌駕するB₁と口径が脚径より小さいB₂の2つの形式がある。大きさは口径の区分で、20cm以上の大型と、17・18cmの中型と、15cm以下の小型の3種が見られる。B₁は大型・中型の2者、B₂は中型・小型の2者が存在する。

2 期

高杯B₁は山中様式に存在する半月状の杯部をもつ形状に系譜をもつ器種と考えることができる。高杯B₂は廻間式土器の開始である2期(廻間I式1段階)をもって出現する形式である可能性が高い。また中型・小型も同時に存在してゆくものと考えられる。口縁端部の細部彎曲調整の出現は他の器種と同様である。

3 期

半球状の杯部が最も深くなる段階であり、こうした方向は高杯Aにも認められ、3期の特色と考えることができる。口縁端部は外方にやや突出する傾向が認められる。3期新相になると杯部上半が内側に傾きはじめ、全体に箱形状を呈するものも存在する。脚部には横線文を施す資料が多い。

4 期

杯部は急速にその深さを減少させ、B₁は浅く大きく開いた杯部に変化する。B₂は3期の形状を踏襲するようであるが、脚部はしだいにわずかな屈曲点を残す形状に変化してゆく。

5 期

高杯B₁はほとんど姿を消す。B₂がその主体を占めるようになり、かつB₂小型品が急増し、目立ちはじめる。脚部の屈曲は明瞭となるが以下稜線を残すほどに屈折することはない。

6 期

高杯B₂は小型品がほとんどとなり、杯部の器高が浅く、半月状を呈する。脚部は逆に大きく外反し、屈曲点から裾部にいたる長さが増す。杯部のミガキがヨコ方向に変化する。

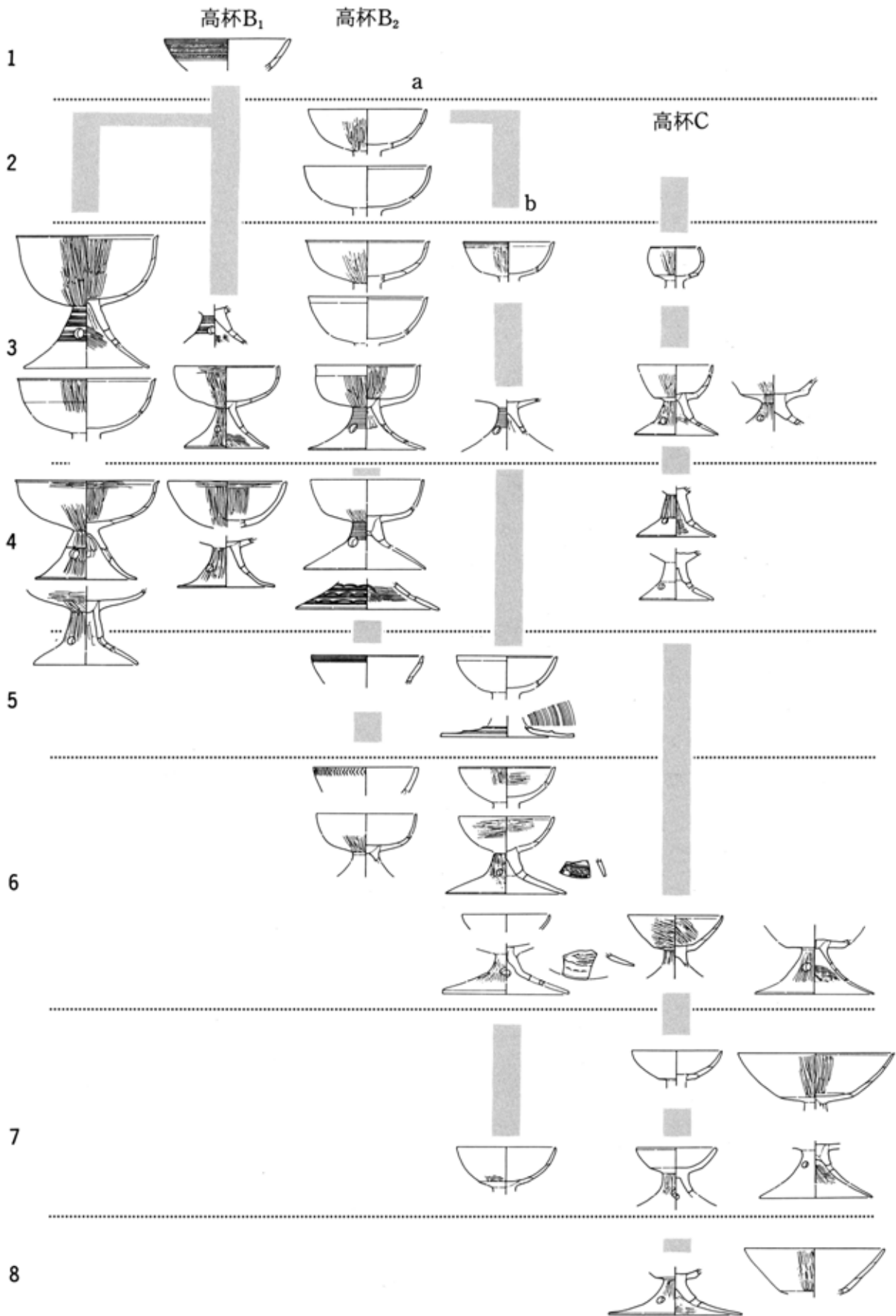
7 期

7期になるとB₂b(小型品)形式のみが残存し、杯部の器壁が著しく薄く、精製化する。

高杯C

有稜高杯 杯部に稜をもつ有稜高杯。中・小型品。その変化は廻間遺跡において、やや不明瞭であるが、5期と7期に画期が存在するようである。

高杯Cの出現は2期に遡る可能性を残すものの3期には確実に存在する。杯部に比べ著しく小型の脚部をもつものがI式期に多い。脚部は当初より屈曲部を有するもので、裾部は著しく小さいという特色がある。5期、すなわちII式期になると、脚部が大きく発達し、脚径が口径を凌駕する形式が出現する。脚部は多く文様を施し、波線文・沈線文を組み合わせることが一般的である。7期、III式期になると杯部が浅く、大きく彎曲を保ちながら外傾する形式が登場し、脚部は屈曲点をもつものから大きく外反する形状に移行する。



第31図 高杯B・Cの変遷 (1 : 8)

〔器 台〕

器台はA・B・Cの3形式が見られ、その内Aは口縁部の形態からA₁・A₂に分類する。Bは同様に主に口縁部の形態からB₁・B₂・B₃・B₄に分類することができる。大きさは口径のみの区分であるが、口径15cmをさかいに大型と小型に大別しておく。AとCは大型・小型の両者が存在するが、Bは小型品のみで構成される。

消 長

器台Cは廻間式期以前から継続する形式であり、中空器台の系譜を引くものと考えられる。器台Aは円錐状の内彎脚をもつもので、廻間1期に登場する。高杯Aの変化とほぼ同調すると考えてもよく、脚部が明確な円柱部をもたず、口縁部からただちに大きく内彎する形状をもつ器台の出現は廻間2期をもってと理解することができる。この内彎脚をもつ器台Aの完成が、以下東海地域を代表する器台の特徴を決定した。

小型化 器台Cの小型化はすでに山中様式の中にその萌芽的現象が見られ、より大型とより小型品の形態が存在する。しかし今だ未分化であり、小型品として法量的に分化するのは2期をもってと考える。器台A・Cの口径15cm以上の大型品は廻間4期をもって姿を消し、小型品は廻間6期まで存続する。口径11cm未満で脚径が口径を凌駕する器台Bの所謂小型器台は廻間5期（Ⅱ式）をもって成立する形式である。器台Bは廻間8期に画期を設定することができる。それは器台B₁からB₂に変化することに象徴されるように、脚部の形状において屈曲部が消失し、口縁部からただちに大きく外反する形状に変化する。また器台B₄も参入する。

品種構成比率を概観すると、全体に10%未満であるが、廻間2期に比較的多く見られる。その後徐々に減少し、4・5期が最も低い。器台A・C大型品の消失に関係があらう。その後再び増加し器台Bの盛行につながる。廻間8期にいたると構成比率では初めて10%の枠を突破する。廻間8期に器台における一つの画期を想定する理由はこの点からも窺い知れよう。器台Bの出現する5期（廻間Ⅱ式1段階）と脚部の変化と器台Bにおける形式の多様化が見られる8期（廻間Ⅲ式2段階）に器台の画期が存在する。

なお中央部が貫通するものが主体を占めるものの、そうでない形状も見られる。本来は区分すべきであるが、後者の量が極めて少ないため分類できえていない。

2～4期（廻間Ⅰ式期）

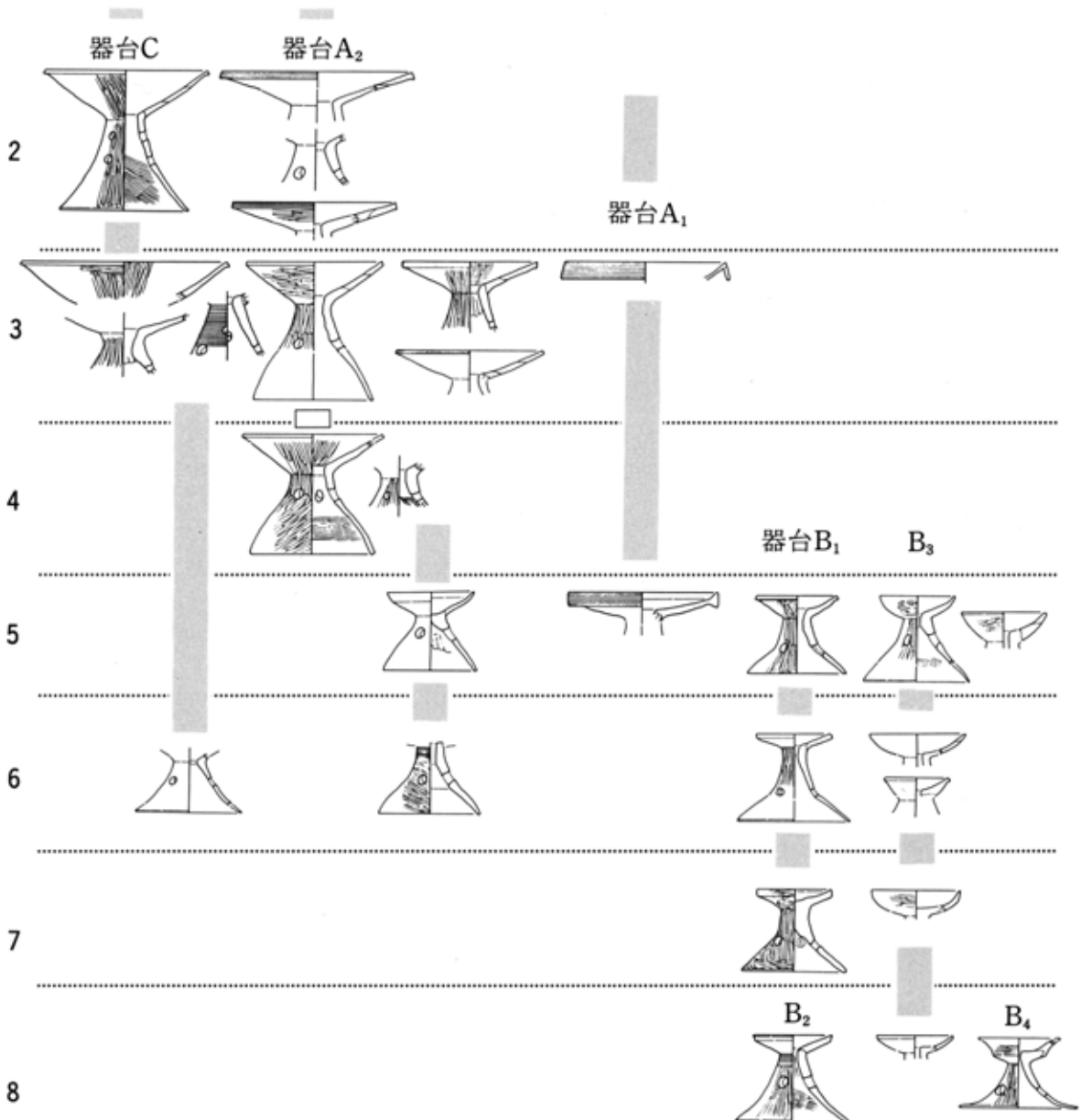
器台A・Cにより構成される。3期古相まで器台Aの口縁端部が拡張する形状のものが存在し、沈線文を施すものが多い。器台Aは高杯Aの脚部変化とほぼ同調して変化し、器高の減少が基調となる。A₁は5期まで残存するもののⅠ式期をもって激減する形式であらう。

5・6期（廻間Ⅱ式期）

器台Bが出現し、器台A・Cの小型品が残存する。脚部の変化は内彎脚の喪失に向かって進行する。

7・8期（廻間Ⅲ式期）

7期になると器台Bに統合され、他の形式はすでに消失したと考えられる。脚部は屈折点は残存するも、内彎から外傾、直線化に変化する。8期になるとB₁からB₂に変化し、B₄の登場等器種が豊富になる。と同時に量の増加が見られ、小型器台が盛行する。



第32図 器台の変遷（1：8）

〔壺〕

壺 A

壺Aは垂下拡張口縁部に擬凹線文を施し、体部に文様、各部位に赤彩を施す加飾壺で、パレススタイル壺と総称される一群の壺である¹⁷⁾。(以下パレス壺)基本的に3つの要素から構成される加飾の広口壺で、第1に口縁部の拡張と擬凹線文、第2に体部上半の文様帯、第3に赤彩をもってパレス壺を規定することができる。

消 長

壺Aは口縁部の形状から3つの系統を考えることができる。 $A_1 \cdot A_2 \cdot A_3$ と変化する類型と A_4 及び A_5 の3系統である。 $A_1 \cdot A_5$ は廻間1期にすでに成立しているものと考えられる。ただし横線文と不連続波線文を交互に組合わせ、加えて波線文に赤彩を施すパレス文様の確立は廻間2期をもってと判断してよい。またパレス壺に特有のしもぶくれ状の体部の出現もやはり2期以降と考えられる。 A_4 の登場は3期新相であり、口径25cm前後の大型のものが一般的で、棒状浮文を必ず用いる。 A_1 の系統は口径18・19cmが一般的で棒状浮文はむしろ稀である(円形浮文は散見)。体部の波線文はⅡ式期になると一気に大きく強調されるようになり、7期をもって壺Aは終焉する。

1 期

壺 A_1 と A_5 が存在し、体部は球形で、文様構成は横線文と斜線文を組合わすものが多い。

2 期

壺 A_1 は口縁部内面に明瞭な有段の文様帯(平坦面)をもち、頸部に凸帯を有するものが多い。パレス文様、しもぶくれ体部が成立。 A_5 は口縁部内面が直線的に屈折するものである。

3 期

壺 A_4 の登場

A_1 の口縁部内面文様帯が内彎しはじめ、3期新相になると内彎口縁をもつ A_2 に変化する。また同じ時期に口頸部が内彎する大型の A_4 が A_1 を母体として誕生する。 A_4 の登場こそパレス壺を代表する形式の確立と位置づけてよい。体部はパレス文様一色に統一させる。

4 期

3期新相と大きな変化は認められない。口縁内部の文様帯はますます内彎し、口縁の垂下技法は縮少、傾斜をもち始める。

5 期

A_2 から有段口縁状の A_3 へと大きく変化する。口縁部の垂下は消失し、口縁部が外傾する。口縁内面の羽状文は単純化され、体部の波線文は大きく強調される。工具は主体であった貝殻からクシに統一される。体部に幅広い凸帯を用いるものが散見できる。 A_5 は口縁部の文様帯が欠落してゆく。

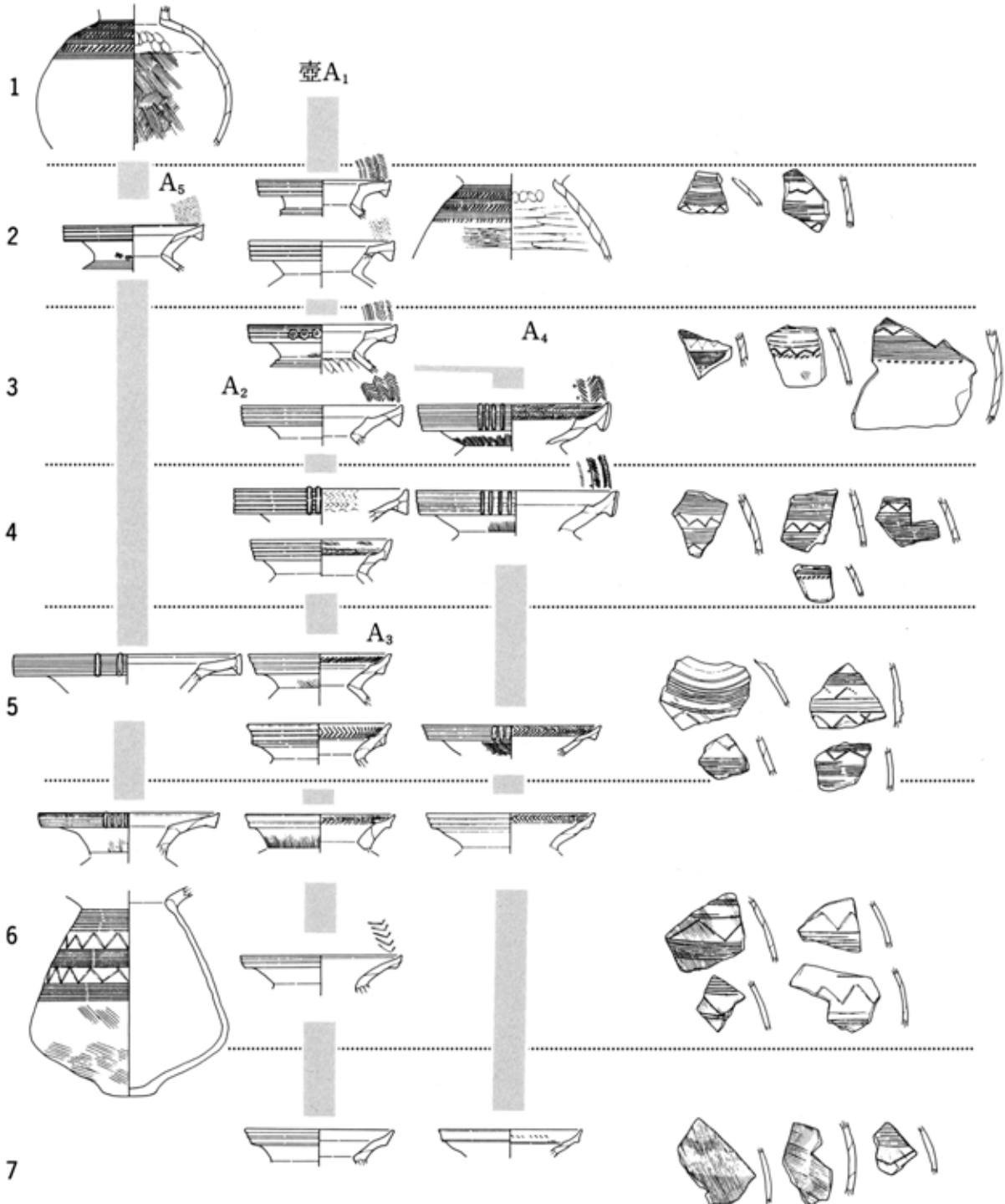
6 期

$A_3 \cdot A_4$ の区分がほとんどなくなり、口縁部の拡張が小さく擬凹線文が減少する。体部の文様は横線文が痕跡的となり、波線文のみ強調される傾向が強い。工具はクシに加え板・

ヘラ描も見られるようになり、体部外面調整はミガキが省略されハケメがそのまま残存することが多い。 A_5 は口縁内部の平坦面がより拡張し、端部の垂下拡張がほとんど欠落する。

7 期

全ての文様が消失する傾向が強い。体部には赤彩による線描波線文のみで表現されるものが存在するようになる。壺Aは7期をもって終焉する。



第33図 壺Aの変遷 (1:8)

壺 B

広口壺 広口壺を総合して壺Bとする。口縁部の特色からB₁・B₂・B₃・B₄・B₅の5形式が存在する。

消 長

壺B₁は明らかに廻間式土器様式以前に成立する形式である。一方B₂～B₅は本様式内で生み出されてくる形式と考えて大過ないであろう。

廻間2期では体部は、その最大径を体部中位に置く形態が多い。口縁端部に沈線文・刺突文系の文様を施すものが一般的である。壺B₁は口縁端部に明瞭な拡張する面を有するものと、そうでなく単純な形状の2つに細分できる。3期になるとB₂の口縁部はより短頸になり、外反度が小さくなる。5期になると壺Bが激減する。体部は3期新相を中心に最大径が体部下位にさがるしもぶくれ状を呈するものが一般化する。壺B₅として一括した口縁部が有段化するものは、5期から散見できるようになる。

パレス壺以外の広口壺B類の盛行は明らかに廻間I式期内にあり、その器種の豊富さは一つの特色でもある。

壺 E

柳ヶ坪型壺

口縁部が有段状を呈する加飾壺であり、柳ヶ坪型壺と呼称されているものである¹⁸⁾。その特色はまず口縁部の有段と羽状文。体部上半の文様は幅広い横線文と波状文を1単位毎施し、その動作がきわめて不鮮明であるという柳ヶ坪文様が見られる。また体部最大径を底位に置く、極端なしもぶくれ状を呈する¹⁹⁾。口縁部の特色からE₁とE₂に区分する。

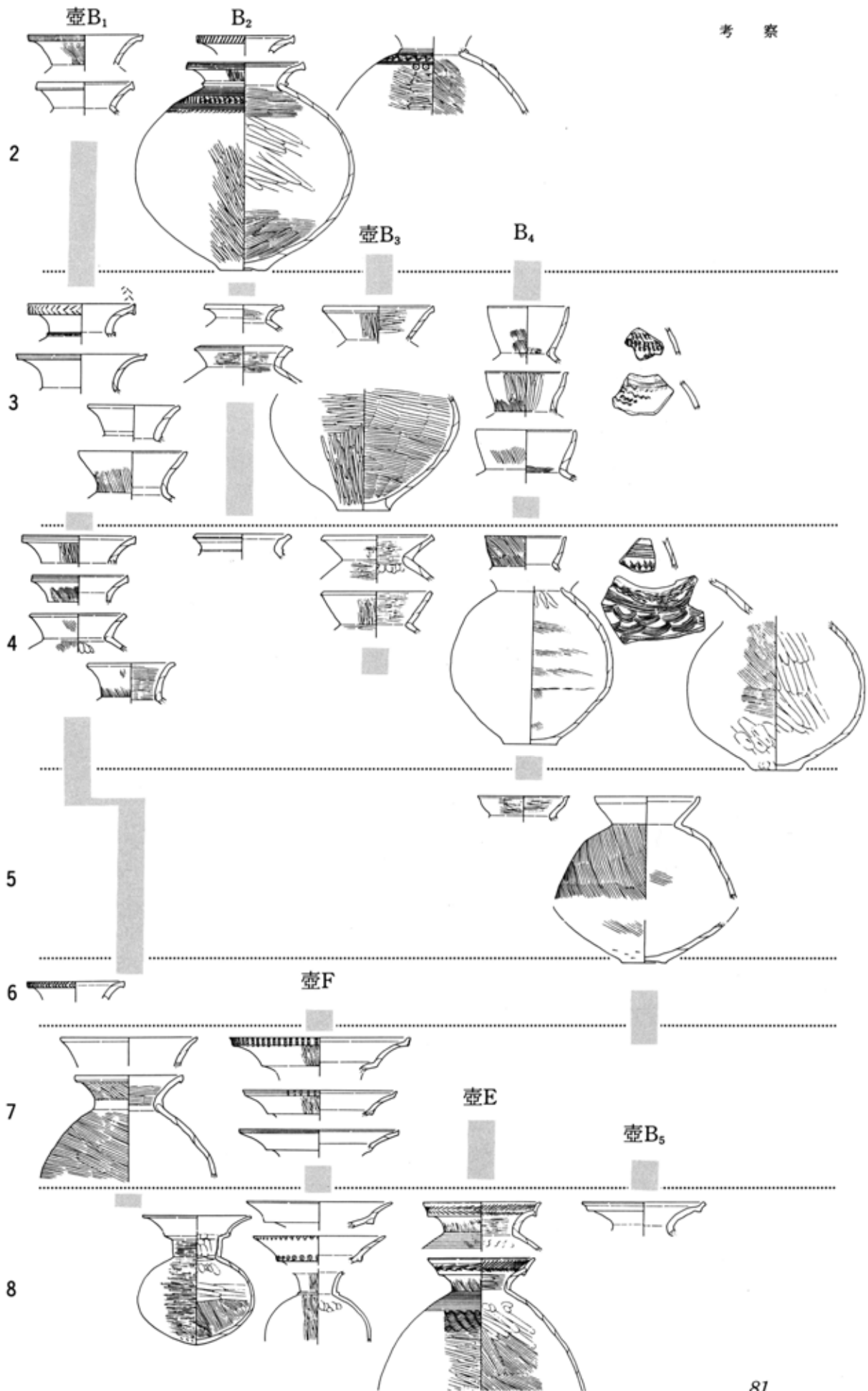
壺Eは廻間III式期（5期）をもって登場すると考えられ、7期のものは有段口縁というより口縁端部を拡張した幅広い面をもつ形状である。頸部に凸帯をもつものが多く、口縁部の羽状文は複数単位である。8期になると明瞭な有段口縁をもち、口縁部の羽状文は単純化する。頸部の凸帯は見られなくなる。その後（廻間III式3段階以降）壺E₁からE₂に大きく変化し、口頸部は二重口縁技法を採用する。口縁外面の羽状文はより大きく強調されるようになる。

壺 F

二重口縁壺

二重口縁壺で廻間遺跡においては7期（廻間III式1段階）をもって登場する。廻間様式では廻間II式期に散見できる見通しをもつものの、様式内に広く定着し、新解釈を基に受容土器として位置づけられてくるのはIII式期になってからと考える。

7期では口縁端部が上方に肥厚する形状が多く、はねあげ口縁を呈する。また端部に幅をもち沈線文・棒状浮文を用い、加飾性が強い。8期になると端部の肥厚は見られず、丸く整えられるものが主流となる。外面調整は基本的にはタテ方向のミガキが主体であり、ミガキC（細かいヨコ方向のミガキ）は少量で客体的であり、「搬入品・模倣品」と考えられる。III式3段階以降の形状は、特に口頸部が大きく外傾・外反するものに変化していくようである。



第34図 壺B・E・Fの変遷 (1:8)

壺 C

内彎口頸
壺

口頸部が内彎し、体部が比較的小さい内彎壺を総合し壺Cとする。壺Cは口頸部の形状によりC₁~C₅の5つの形式が存在する。

消 長

壺C₁及びC₂は廻間様式直前に成立しているものの廻間2期になると内彎が明確化し、体部が球形、ややしもぶくれ状を呈するようになり、以降の形状の基本形が成立する。また廻間2期は壺C₃（ヒサゴ壺）C₅がほぼ同じ時期に成立してくる可能性が高い。C₃はC₁の内彎長頸壺を母体として生み出されてくる新形式であり、その特色は口頸部の独特の形状にある。端部周辺は微妙に外彎し、また口頸部には文様を施すものが一般的である。主に連弧文を多用し、横線文を組合わせるものも見られる。ヒサゴ壺は口頸部が垂直に立ち上がるものと、内彎を強調させるものと2つの形態が存在する。壺Cは時代の経過とともに小型化する傾向が基調にあり、特に口頸部の相対的縮少が著しい。廻間5期になるとこの口頸部の縮少化が明確化する。C₃はC₄形式に変化する。内彎細頸壺C₂は廻間1期からすでに他の器種に見られない特色が存在する。それは明瞭な底部を保有しない点であり、尖底からしだいに扁平底へと変化する。本質的に器台と組合わされて使用する目的をもつ壺と考えられる。この思想は2期以降になると壺C全体へ波及し、特にヒサゴ壺・内彎長頸壺（小型品）に顕著に見られるようになる。壺C₂は5期まで残存するものの本来廻間I式をもって終焉する形式と考えてよい。また壺C類は廻間7期に一部認められるようだが、基本的には廻間I・II式期特有の形式と理解してよいであろう。

器台と組
合

壺Cの体部の変化をまとめると、1期のものは体部中央に最大径をもち、算盤玉形を呈している。C₁は平底でC₂は尖底の差は明確に存在する。2期になると体部最大径は体部下半に移動しはじめ、全体に丸味をもつ形となる。3期新相をもって最大径が底位に落ち、完全にしもぶくれ状を呈するようになる。また平底からやや突出した平底・あげ底状に変化する。ヒサゴ壺C₄は5期になると丸底で小さく底部が凹む独特な形状が見られる。外面調整はタテ方向のミガキが基本であるが、体部のヨコミガキはII式期から顕著となる。（壺C₅以外）

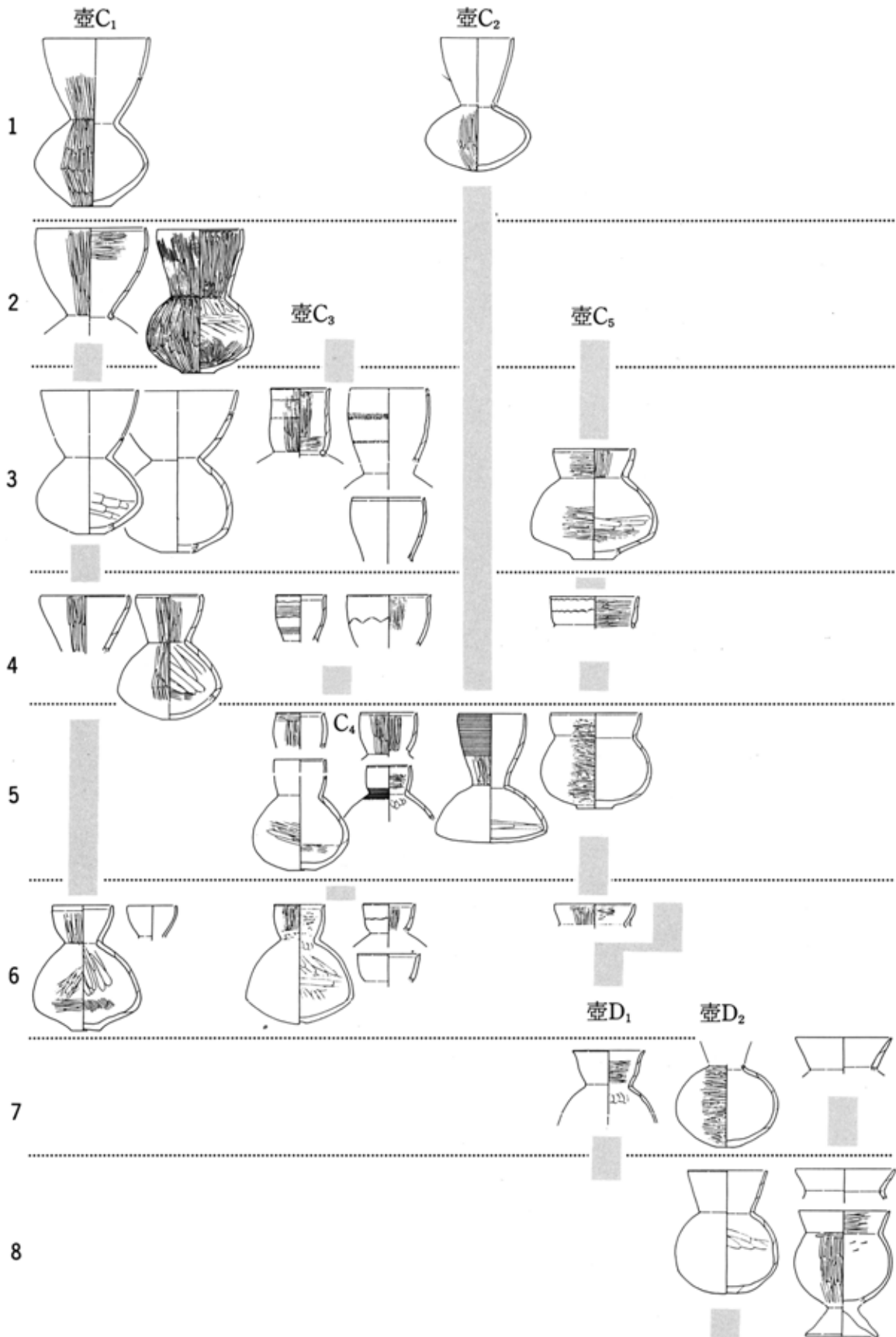
壺C₁・C₂は特に小型壺が2期より散見でき、小型の器台と組合される。またこれらを一体化して表現したものも存在し、これらをI式期の特色に加えてよいであろう。（117頁参照）

壺 D

壺Cに対して口頸部が直口・外反する中型の壺を総称する。廻間遺跡では個体数が少なく、明確な分類ができていない。D₁とD₂に大別し、D₂は直口口縁D₂aと広口口縁D₂bに別けて考えることができる。

D₁は廻間II式期後半代に成形してくる可能性をもつ壺で、口頸部が流線的で外反するやや複雑な形状をもつ。

D₂は廻間7期（III式1段階）から出現する形式で、体部球形を呈する。外面調整はミガキが用いられ、外来系土器の範疇で考えておく必要がある。



第35図 壺C・Dの変遷（1：8）

〔鉢〕

鉢は口径・器高において比較的大型のものをA、小型のものをBとして総合しておく。

鉢AはA₁～A₆に分類でき、BはB₁～B₄に分類する。

消長

鉢A₅とした形式以外は廻間2期以前に出現している可能性が高く、特にA₃とした受口系口縁を有する鉢は山中様式での重要な器種である。A₁は口径が体部径を凌駕するものであり、廻間6期になるとこの形状が著しく小型化し、鉢B₃へと連続するものと考えられる。なお7期をもって鉢類の精製化が開始される(廻間Ⅲ式期)。受口系口縁をもつA₃及び有孔鉢(おそらく直口鉢)A₆は廻間4期(Ⅰ式期)をもって終焉する。廻間8期になると鉢B₄とした精製品である一群の形式が登場する。

2～4期(廻間Ⅰ式期)

ミガキ
手法

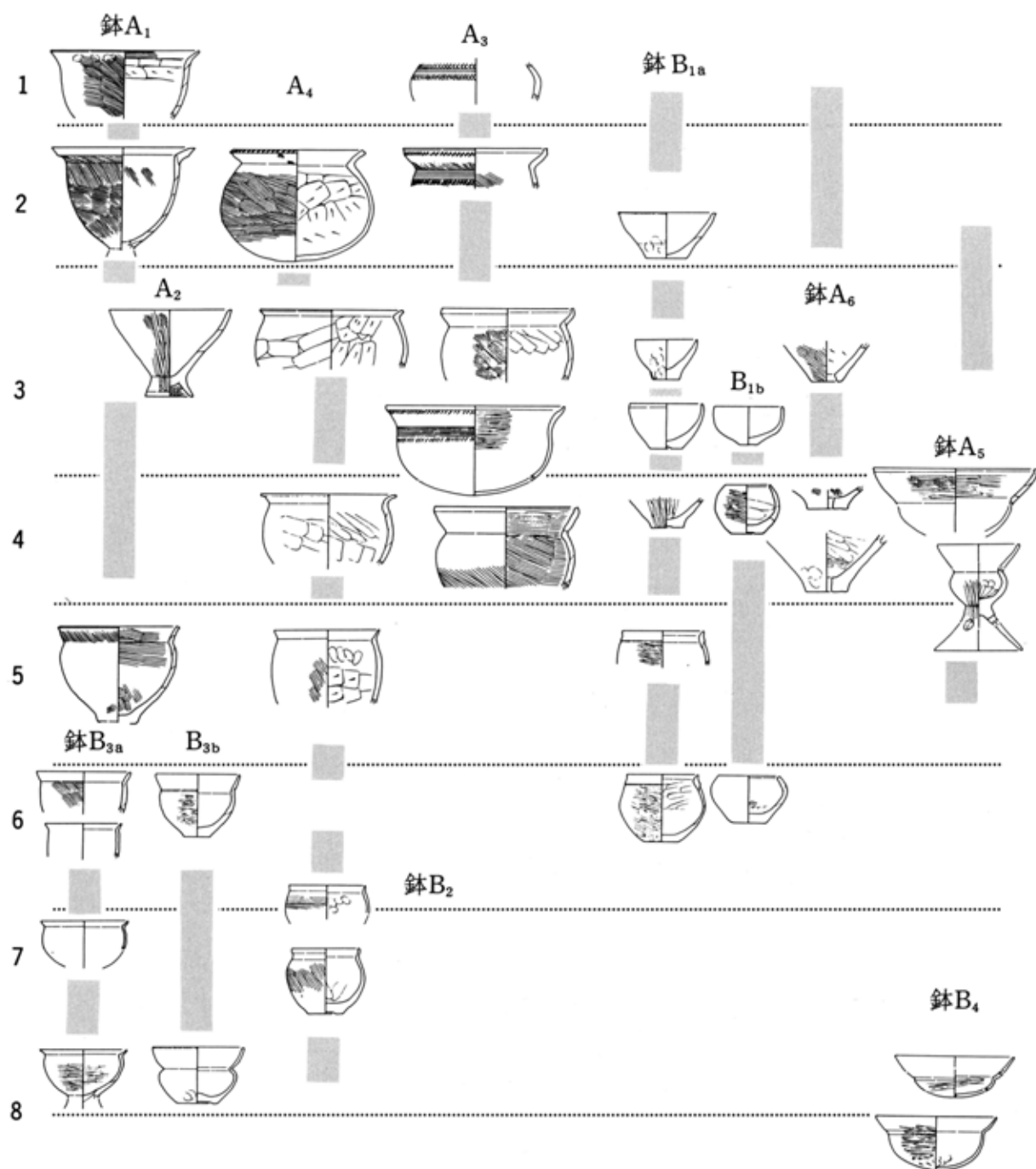
廻間Ⅰ式期は比較的大型の鉢であるA類によってほとんど占められる。そのような中であって小型品鉢B₁も定量存在する。総じて廻間Ⅰ式期をもって鉢Aの多くの形式はその姿を消すか、激減すると考えてよく、A₁・A₄も急速に器形の縮小化が進行する。外面調整に明瞭なミガキ手法を鉢Aに本格的に採用するのは廻間3期新相になってからと考えてよいであろう。鉢A₃は廻間3期新相をもって受口系口縁の形状が痕跡的となる。鉢B₁はやはり3期新相に2つに分化する。一つは直口鉢の基本形を留意しつつも口縁部がやや内彎するもの(a)と、体部が大きく彎曲するもの(b)である。4期になるとB₁は口径が体部最大径より小さくなり、底部の突出もほとんど見られない。

5・6期(廻間Ⅱ式期)

5期の鉢A₁・A₄は著しく形状全体が小型化の傾向を呈しはじめ、AからBへの過渡期的様相を見せている。鉢B_{1a}は口縁部が意識され、幅をもち把厚する形状に変化する。端部も同様に面をもつ。6期になるとB₁は体部が大きく屈折する形状を呈する。B₁は廻間Ⅱ式期をもって消失する形式であり、その影響はおそらくB₂へ連動する。鉢A₁・A₄はそれぞれB₃・B₂に形状が移行するものと思われる。B₃はさらに口径が比較的短いもの(a)と、長いもの(b)に分化するようである。廻間6期にいたると鉢類は小型品のみとなる。

7・8期(廻間Ⅲ式期)

廻間7期は鉢B₂・B₃が存在し、器壁は全体に薄くなり、精製化が進行する。7期までは確実に平底を呈していたものが、8期になると丸底化が急速に進み、後続期では完全に丸底化する。ミガキC(細いヨコ方向のミガキ)が多用される。鉢B₄を中心とする新しい器種が登場する。



第36図 鉢の変遷 (1 : 8)

6) 廻間Ⅰ式～Ⅲ式期

廻間遺跡の資料を使用して出土土器を1～8期に区分することができた。それは主に一括性の高い資料を基準に堅穴住居出土資料を組合せることにより実施し、器種分類とその変遷を手掛りとしてまとめたものが前述の区分である。ここではこれらの諸点を基に、濃尾平野の土器様式を設定することにした。濃尾平野に固執する理由は、一つには四面を閉された地形的環境をもち、特定の土器様式でもってある程度一つの地域としてまとめられる見通しをもつからである。そこには伊勢湾あるいは東海地域の代表的器種組成と、その変化の在り方の典型的な姿を見出すことができる。したがって廻間遺跡出土遺物を中心に、濃尾平野各地の土器群を利用しつつ土器様式を組立てることになる。

廻間2～8期をここで改めて廻間Ⅰ～Ⅲ式期の3つに大別する。すなわち廻間2～4期をもって廻間Ⅰ式期を設定し、廻間5・6期をもって廻間Ⅱ式期とし、廻間7・8期及び塔の越遺跡SX01²⁰⁾・若葉通遺跡SB02²¹⁾をもって廻間Ⅲ式期を設定する。なお廻間Ⅱ式は廻間遺跡以外良好な資料にめぐまれていないのが現状であり、廻間5・6期の細分のみによる作業に終始した。将来資料の増加をまちたい。廻間Ⅰ～Ⅲ式はさらにその内部を各4つの段階に細分しえるのであるが、Ⅱ式期における状況に代表されるように他遺跡との検証作業に問題が残る結果となった。したがって、ここでは一応大様式内の器種変遷の組合せにおける各段階程度に留まるのであり、将来的に資料の増加をまって細別様式として再構築する必要がある。

廻間様式はその前様式である広義の山中様式と後続様式である松河戸様式²²⁾により区分される。では廻間様式とは何か。何をもって代表されるのかといえ、単純化を恐れずに言及すると以下のようにまとめられる。甕と高杯が7・8割近くを占めることを前提として、甕C（S字甕）と高杯A（有段高杯、ただしA₁を除く）の時代であるといえよう。また甕Cの最大の特色である軽量甕の時代と換言してもよい。広義の山中様式は器種に無関係に加飾性を強調する気風をもち、一方松河戸様式は外来系土器群の定着による器種の置換によって廻間様式と明確に区別できる。濃尾平野の個性の消失が廻間様式の崩壊をもたらし、東日本に広く影響をあたえた土器群の創造が、廻間様式の開始である。廻間様式以降を古式土師器の範疇で考えることにする。

廻間式以前

廻間式以前 廻間遺跡SB02、あるいは高蔵遺跡C区第3層²³⁾、瑞穂遺跡4次SB02²⁴⁾をもって山中様式新相（3区分）を考える資料と位置づけることができる。その特色は高杯A₁と甕A₁・Bにある。甕A₁は口縁部に刺突文を施し内面ケズリ調整をもつもので、山中式土器を代表する形式である。甕Bは受口系台付甕であり、甕Bの比率の高さがこの段階を規定する要因と見てよい。高杯A₁は2系統の変遷が存在し（70頁）内彎形態の登場が印象的である。内彎志向はこの段階ではまだ他の器種に広く波及せず、端部の屈折程度に限定できよう。従来「欠山式古相」と考えられていたものの大部分を含むものと思われる。その内容においてなお細分が可能であり、廻間遺跡SB02は終末期を考える良好な資料であろう。

廻間 I 式期

廻間遺跡 2 期、3 期古相、3 期新相、4 期をもってそれぞれ 1～4 段階とする。廻間 I 式期は形態の内彎志向という最大の特色をもち、S 字甕・ヒサゴ壺・パレス壺に代表される濃尾平野の個性的な形式の誕生・定型化が認められ、各器種に小型品がそれぞれ随伴する。従来「欠山式土器」と通説されていたものの多くを含むことになる。

1 段階

1 段階

廻間遺跡ではより古い様相を残す SB67、新しい様相が認められる SB75、加えて SB30 をもって代表することができる。また他の遺跡では仁所野遺跡第 2 号方形周溝墓²⁵⁾・高蔵遺跡 D 区 1 層²⁶⁾がこの段階の良好な資料と考えられる。

甕では甕 C (S 字甕) の登場と甕 A・B、特に A の器種の多様化を指標とすることができる。甕 A は A₃・A₄・A₅ の出現があり、その内 A₃ の直口口縁と、A₅ の内彎口縁は注目したい。体部は球形を維持し、内面ケズリ手法が多く見られる。甕 B は B₁・B₂・B₃ が存在し受口文様(刺突文・横線文)が盛行する。甕 C は S 字甕 O 類に限られる。口縁各段は外反し、刺突文は細かく、押引状になることはない。外面調整は単斜方向のハケメである。甕の比率は B・A・C の順に多く見られる。

高杯 A₁ は残存し、しだいに A₂ に統合される。高杯 A₂ の誕生は、以降の高杯の形態変化の原型(杯部深・稜径の減少)となり、杯部角度(第 37 図)は 60°以下に定着。脚部は杯部との接合点からただちに大きく開く内彎脚が確立する。端部には細部彎曲調整、脚部に内彎脚調整技法が成立を見る。高杯 B (碗型高杯) は脚部が口径を凌駕する B₂ 形式の出現と、口径 15cm 未満の小型品 (B_{2b}) の登場が注目されよう。

器台は器高が高く、端部を肥厚し沈線文を施すものが主体を占める。小型品が完全に分化し定着する。

壺は、まず壺 A₁ の定型化に特色がある。ここで言う定型化とは口縁部内面の文様帯が平坦面をなし、体部の形状のしもぶくれ形態、横線文と不連続波線文を組合せ、波線文に赤彩による線描が施されるという「パレス文様」が確立することである。壺 B は B₃・B₄ を加えて器種が豊富になる。加飾性が強く、特に口縁端部には各種の施文法を駆使する。壺 C (内彎口縁壺) は C₃ (ヒサゴ壺)・C₅ の登場及びその小型品が見られるようになり、口頸部の内彎が強調される。体部は算盤玉型から最大径が下降し、しもぶくれ状になる。

鉢は前段階から継続する形式によって構成される。第 48 図に示した鉢 A₅ 及びその類、ならびに A₄ は本段階から開始する可能性が高い。

2 段階

2 段階

廻間遺跡では SZ04、SU04、SB01、SB10 を中心に考えることができるが、能田旭遺跡溝状遺構²⁷⁾により良好な一括資料(標式資料)を見ることができる。また朝日遺跡 L 区 SZ01²⁸⁾もこの段階に含められよう。

高杯 A₂ の形状、A₃ 及び S 字甕 A 類古段階の登場に特色づけられる。

甕は 1 段階まで多く存在した甕 B (受口系甕) が以前として多くを占め甕 A (く字甕)・

C（S字甕）が増加傾向を見せる。体部は長胴化が開始される。S字甕A類が登場、O類が残存。

高杯A₂は杯部の深さが相対的に大きくなり、逆に脚部が縮少、杯部と脚部の器高比がほぼ同様な近い数値になる。高杯A₃は1段階に萌芽の現象が見られるものの、2段階になると明確な文様帯を形成するようになる。しかしまだ多条化していない。高杯Bは杯部が深くなり、端部は外方へ強く突き出したような形状を見せる。

器台は器台Aが主体となり、小型品以外では内彎脚が主体となる。

壺AはA₁の体部文様構成がバレス文様に画一化する。口縁内面の文様帯はやや彎曲しはじめる。壺Cは体部最大径が下降し、しもぶくれ形態が定着する。

本段階をもって終焉する形式には甕B₁・B_{2a}・C₁・壺A₁がある。

3段階 3段階

廻間遺跡 SK51、SB03、SU02、SB39を中心に、その主要構成器種をもって考えることができ、その他勝川遺跡 SZ22²⁹⁾が存在する。狭義の欠山式土器は3段階に代表される。

甕A₄が主体となり、高杯A₂の形状・バレス壺A₂・A₄の登場に特色づけられる。

甕は、甕A形式の中で口縁端部に明瞭な面を有しないA₄が、主体的な器種として位置づけられ、以降甕A（く字甕）の基本型式となる。内面ケズリ手法はほとんど見られなくなり、ハケメb（板）が主体となる。台部は内彎するものが多くを占める。口縁部が相対的に大きくなり、逆に台部の器高が減少し、やや不安定な形状をもつ。甕BはすでにB₁、B_{2a}が消失し、口縁部の文様も欠損しはじめる。S字甕A類は外面ハケメが単射・放射状を呈し、内面のハケメをナデ消す場合が目立つようになる。甕の主体はBからAに移行する。

高杯A₂は杯部の深さが相対的に最も大きくなり、脚部の器高が縮少する。内彎脚調整技法が省略化（A→B）する。A₃は多条沈線文へ移行する。脚部の文様に無文帯を留めない横線文が見られるようになる。高杯Bは口縁部の立ち上がりが垂直化し、箱型を呈するものが存在する。

壺A₁は口縁内面に内彎文様帯をもつA₂に変化する。また口径25cm前後の大型の内彎口頸部をもつ特徴的なバレス壺A₄が登場する。壺Bは急速にその量を減少させる方向に向かう。壺Cは口頸部の器高が減少するようになる。

鉢Aは外面調整にハケメからミガキ調整を採用するものが認められるようになる。鉢B₁は口縁部が彎曲しはじめ、B_{1a}とB_{1b}に分化する。

4段階 4段階

廻間遺跡 SK50の一括資料をもって設定する。

S字甕A類新の出現、高杯A₂の杯部と脚部の崩壊現象に特色づけられる。

甕では甕A₁はほとんど姿を消し、本段階をもって終焉する形式である。A₃は口縁部が直立する。甕Bは全ての文様が省略されるものが多く見られる。S字甕は外面調整に羽状のハケメが定着し、台部のハケメの施し方（体部下位のハケメ調整の結果）が不連続的となる特徴的なナナメハケが認められるようになる。つまりS字甕A類新の段階をもってS字

甕製作（主に調整）技法が確立し、以降のS字甕盛行を約束させることになる。

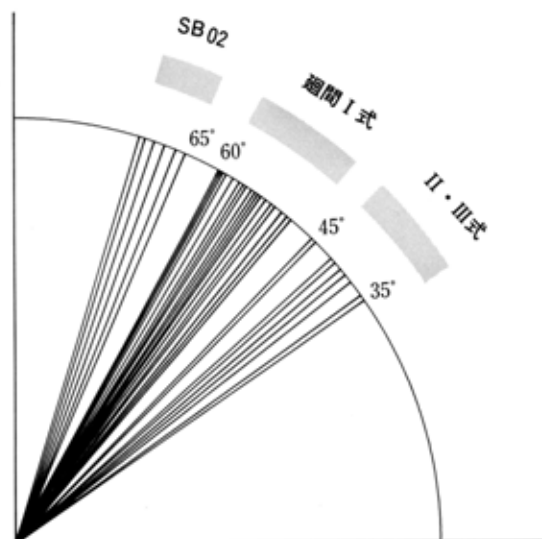
高杯A₂は2段階まで続いた基本形が崩れる。まず脚部においては脚部高が圧縮され、杯部と脚部の器高差が大きくなる。内彎脚の変化が著しく、圧縮化と直線化と2つの方向に進行する。以降この2つの方向はそれぞれ系統的な変化を見せる。特異な内彎脚調整技法は完全に消失する。杯部は相対的に深さを減少させ、見かけの上では大きく外傾したような形状になる。高杯A₃は多条化が進み杯部の半分以上を占めるものも見られる。透孔は2孔1組4方向の穿孔方法があらたに参入し4段階の特色となる。高杯BはB₁がこの段階をもってほぼ終焉しB₂が主体を占めるようになる。

器台・鉢は大型品が4段階をもってほとんど見られなくなる。

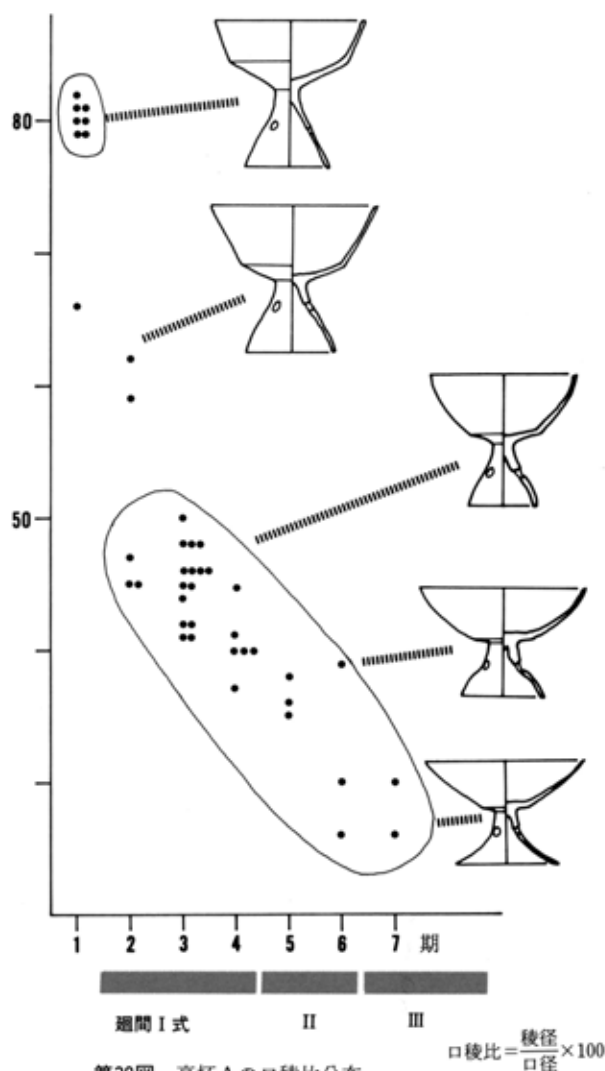
壺BにおいてはB₁・B₃が比較的目立つものの4段階以降壺Bは激減する。

1式4段階の資料としてその他安城市中狭間遺跡溝状遺構がある。

4段階をもって終焉ある



第37図 高杯Aの杯部上段角度



第38図 高杯Aの口稜比分布

いは激減する形式としては甕A₁・甕Bの多く、高杯B₁器台A₂・壺A₂・壺C₃・壺Bの多く、鉢A₃がある。

廻間II式期

廻間遺跡5期新相、古相、6期新相、古相をもって1～4段階を設定する。他の遺跡では良好な一括資料はほとんど認められない。

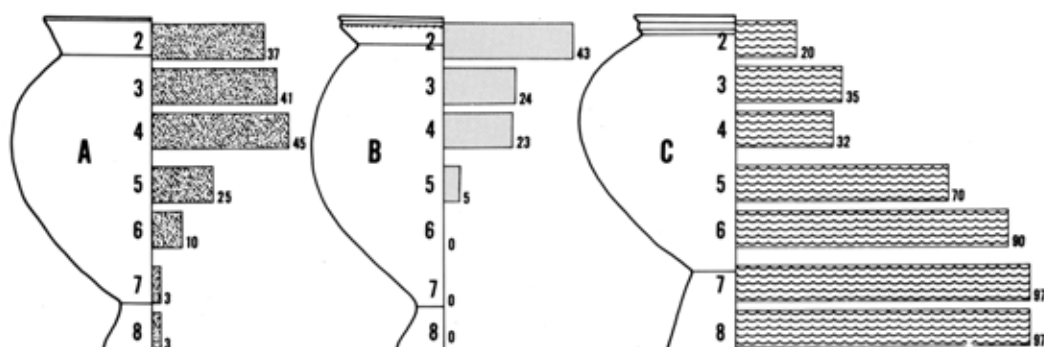
廻間II式期の最大の特色はS字甕B類の登場と甕の比率が50%以上を占め、その内9割以上がS字甕となる点である。甕すなわちS字甕といえる時代が到来した。また小型器台Bの誕生、小型鉢Bの盛行、大型壺の消失を加えることができる。形態の内彎志向が形骸化し、より小型化が基調となる。

1段階 1段階

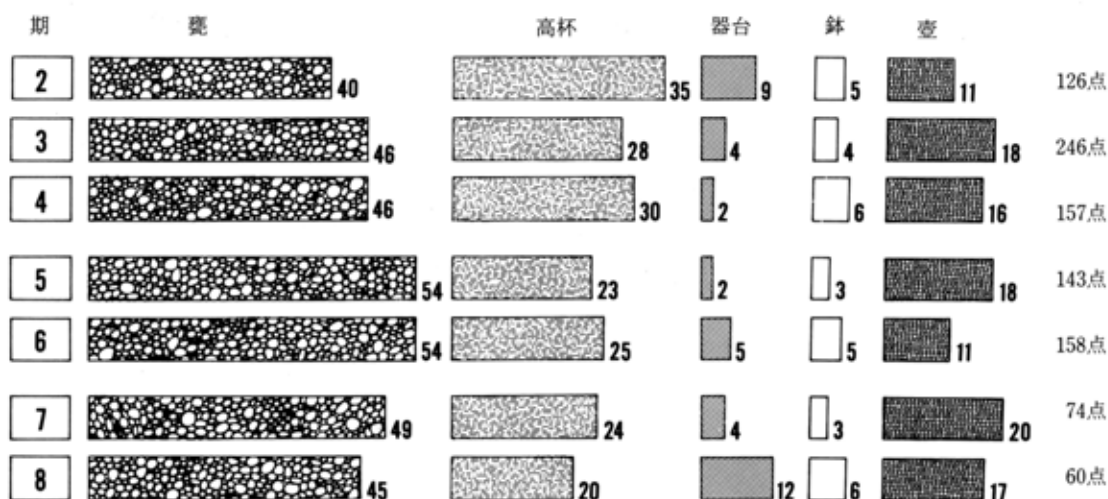
廻間遺跡 SB59、SB49に代表される。その他の一宮市平松遺跡SK01がある。

S字甕B類古・器台B、壺A₃、壺C₄（短頸ヒサゴ壺）の出現に特色づけられる。

甕Bはほとんど終焉し、甕Aは激減する。変ってS字甕が突如70%以上を占めるまで急



第39図 甕の比率



第40図 器種構成比率

甕

大型品

中型品

小型品

増する。S字甕A類新が残存し、B類古が出現する。体部は球形を呈し、肩の張りが強調される。

高杯A₂は相対的に減少し(30%台から20%台へ)口縁部の細部彎曲調整は消失、幅広い斜面のみを留める形状となる。高杯BはB₂に限定され、その中心は口径15cm以下の小型高杯に移行する。脚部に若干の屈曲部が認められるようになる。高杯Cは脚底径が口径を大きく凌駕する形態が出現しその主体となる。

器台は小型器台B₁・B₃が参入、器台Aは小型品が残存し、やや器種が多様化する。

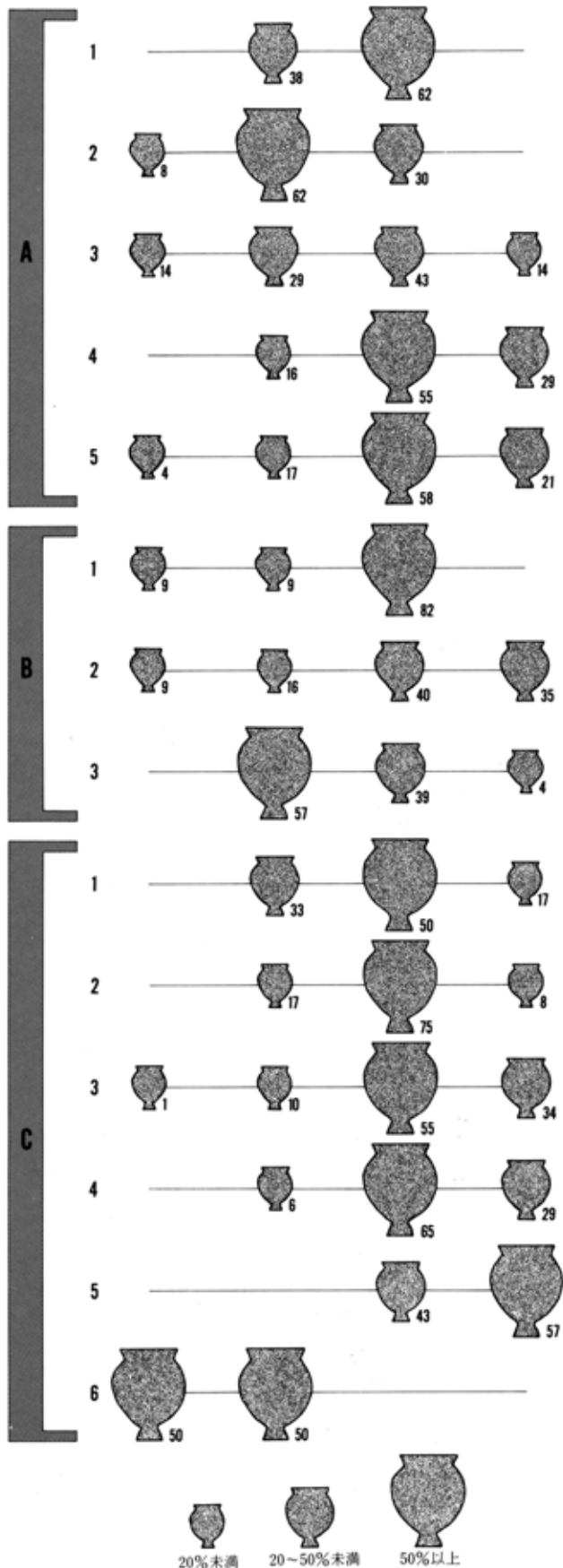
鉢は急速に小型化に向かい、鉢B₁は口縁部を肥厚させ、段をもつ形状に変化する。ミガキ調整が主体をなす。

壺A₂は有段口縁状を呈するA₃に移行すると同時にバレス文様は波線文が大きく強調され、羽状文は単純化する。壺Cは口頸が急速に縮少し、ヒサゴ壺はC₃から口頸部が縮少し、体部が大きいC₄形式へ変化する。

2段階

廻間遺跡 SZ02の良好な一括資料をもって標式とする。その他SB33を加えることができる。

甕はこの段階をもって甕Aの各形式が一斉に姿を消し、3段階以降A₄が残存するのみとなる。S字甕はA類が消失し、B類古に統合される。



第41図 甕の口径分類(%)

高杯A₂は杯部に2つの形状が見られるようになる。内彎志向を残すものと、直線化を志向するものである。以降この2者が高杯Aに併存する。脚部は以前として内彎を留めた形状が主流である。高杯A₂、A₃を小型化した形状のものが散見できるようになる。また高杯A₃に波線文を加えた文様を有するものも見られるようになる。高杯B・Cに加飾性が見られる。

鉢A類、内彎細頸壺C₂は2段階をもって完全に消失したと考えることができる。

3段階 3段階

廻間遺跡 SB60の良好な一括資料をもって設定する。その他 SB50が含まれる。

甕は、S字甕の占める割合が90%以上に達し、甕A（く字甕）はほとんど見られなくなる。甕の画一化が完成し、S字甕一色となる。甕A₄はわずかに残存するも小型品が主流となる。S字甕はB類中に変化し、体部が球形から肩の張りが強調され、体部最大径は上位に移行する。外面のヨコハケは頸部から完全に離脱し下降する。内面調整は指ナデとなり、頸部内面にはハケメの他、ヘラナデ（ナデb）に置換する資料が散見できる。台部は若干開く傾向が見られる。

高杯A₂は内彎脚がわずかに残存する形状になり、杯部の傾斜は最も強くなる。小型品に外反脚に移行した高杯A₄が出現し、しだいに主体的な形状となる。透孔は2段3方向6穿孔が出現し、穿孔数の増加が認められる（高杯A₄の一要素）。高杯の杯部口縁端部は幅の狭い面をもつみのものが存在するようになる。高杯A₃は多条沈線文を施す文様帯から段が喪失し、単に沈線文による区分に変化する。

鉢は小型の直口鉢の系譜を引くB₁はこの段階をもって終焉し、前段階まで続く鉢Aが消失、小型鉢B₂、B₃が出現する。

壺A₃は形骸化が進行し、口縁部の擬凹線文が減少、端部の拡張も縮少する。体部の調整はナデ・ミガキ手法が省略される傾向が著しく、ハケメをそのまま残す場合が認められる。波線文は大型化し、線描の赤彩は繊細さを欠き幅広く粗雑に描かれる。壺Cは体部が大きく、小さな口頸部を製作する形状に変化する。

4段階 4段階

廻間遺跡 SK30、SB55をもって代表させる。

甕Aはほとんど見られない。S字甕B類は中・新段階が併存する。口縁端部の面は不明瞭で、肩部の張りは最も強くなりその特色はC類へと引き継がれる。

高杯はA₂が消失し、変って外反脚をもつ高杯A₄が盛行する。その脚部の形状は若干柱状を残しつつゆるやかに外反、あるいはわずかな屈曲点を残すものが多い。内面に多条沈線文を施すA₃は4段階をもって完全に消失する。高杯B₂は小型品（B_{2b}）のみとなり、脚部はただちに屈曲して大きくより扁平状に開く形状を呈するようになる。

壺は4段階をもって壺類の中で残存してきた壺Cもほとんど見られなくなり、I・II式期での壺の代表形式はことごとく消失する結果となる。II式期後半代に終焉あるいは激減する形式は甕C₃・高杯A₂・A₃・器台A・壺A・壺C₁・C₄・鉢B₁がある。なお元屋敷遺跡

堅穴状遺構出土遺物の主体はII式期後半～III式期前半に置くことができる。

廻間III式期

廻間遺跡 7期・8期そして稲沢市塔の越遺跡 SX01、名古屋市若葉通遺跡 SB02をもって1～4段階を設定する。廻間III式期は濃尾平野の個性的な器種の多くが終焉し、甕の占める割合が再び50%を下まわり減少傾向がみられる。変って新たに参入した壺類・小型鉢・器台は精製化を伴い盛行する。壺の画期と小型品の精製化が主要な変化である。

1段階

1段階

廻間遺跡 SB06・SB45上層資料をもって代表させることができる。SB06とSB45上層は古・新相の関係が見られる。他の遺跡に明瞭な資料が存在しない。

甕は全体の器種構成比率に占める割合が5割を下まわる。甕C（S字甕）はB類が残存するもののC類が出現し主体となる。C類古段階の資料は頸部調整が必ず行われ、体部から口縁部へは鋭く屈折させる状況が生み出されてくる。C₅、C₆が出現する。C₆は山陰系の口縁部をS字甕に合体させたもので大型品に散見できる。一方C₅は口縁部第2段の拡張に特色があり、小型品を中心に製作される。S字甕に初めて新しい要素を付加させた視点は注目される所である。

高杯はその全体に占める比率が20%を確保するものの減少化は決定的となる。高杯A₄は脚部が大きくゆるやかに開く形状に変化する。高杯B₂は器壁が薄く精製化が認められる。高杯Cは杯部の深さが一気に減少し、扁平な杯部に大きく外反する脚部を有する形状が出現し、それまで多々認められていた杯・脚部の加飾はほとんど見られなくなる。

器台はA類が消失し、B₁、B₃により構成される。杯部は浅くなるものの、脚部には屈曲部がわずかに残存する。鉢は全体に精製化する。

壺A₃は各部の文様がほとんど欠落し、体部のバレス文様は形骸化し、特に不連続波線文及び横線文が省略され、赤彩のみによる波線文の表現が見られるようになる。この段階をもって壺A（バレス壺）は終焉する。壺F・壺E・壺Dが出現し定量を占めるにいたる。壺F（二重口縁壺）はII式後半代から搬入してくる可能性が強いが、加飾性に富む受容された壺Fとして定着するのはこの段階と考えられる。口縁端部は上方に肥厚したはねあげ口縁で、棒状浮文・沈線文を施すものが多い。壺Eは柳ヶ坪型壺で口縁部は大きく拡張した形状を呈する。羽状文は複合し、頸部に凸帯を有する場合が多い。

2段階

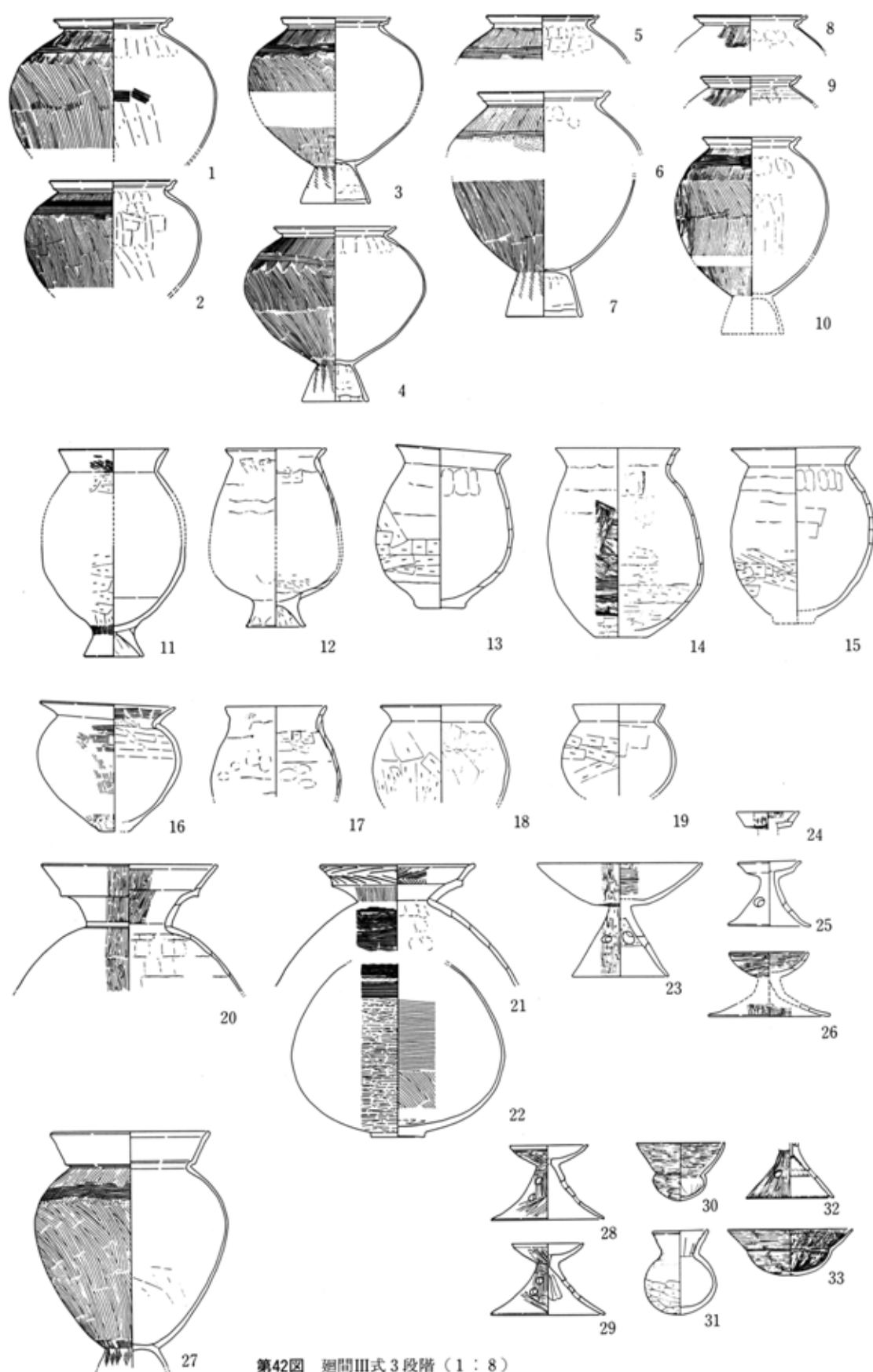
2段階

廻間遺跡 SB12上層・SB56の良好な資料をもって設定する。

甕Cは全てS字甕C類古の典型的な姿を示し、肩の張りが強く、八字状を呈する台部をもつ。甕C₆は口縁部の立ち上がりが直立する。

高杯は杯部端部が鋭く、面取り技法は消失するものが多い。脚部は杯部との接合面からただちに大きく外反する形状に統一される。

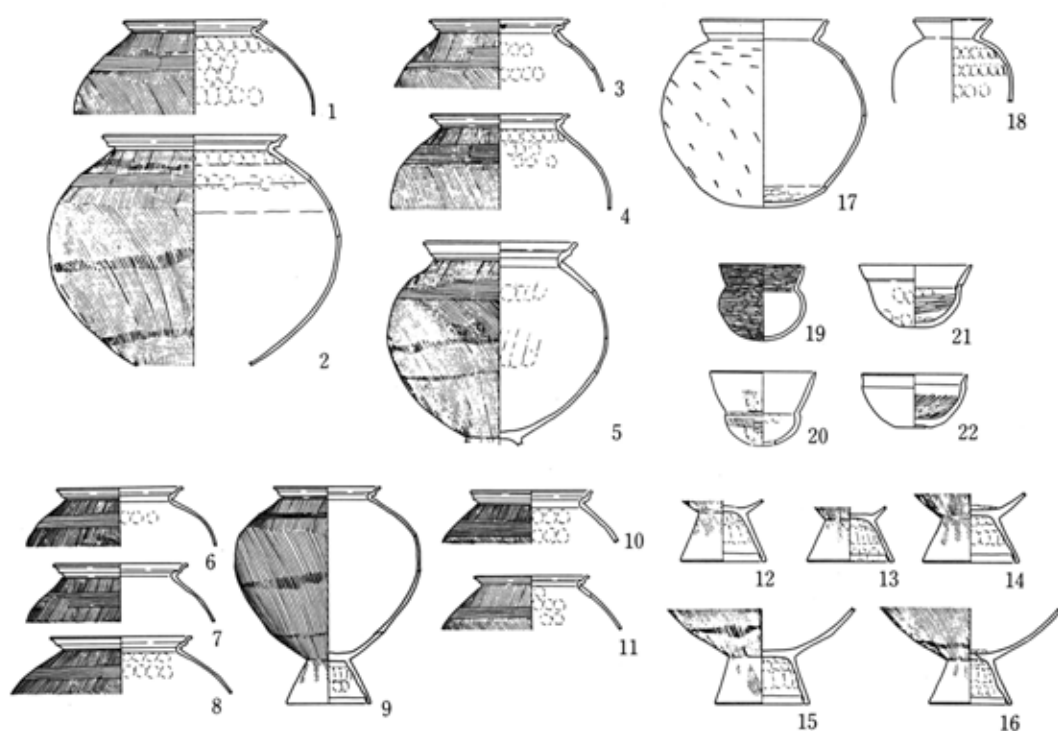
器台は一つの画期をなす段階である。脚部の屈曲を残すB₁が消失し、代って直線的な口縁部と接合部からただちに大きく外反する脚部をもつ形態に変化する。また新たに外反口



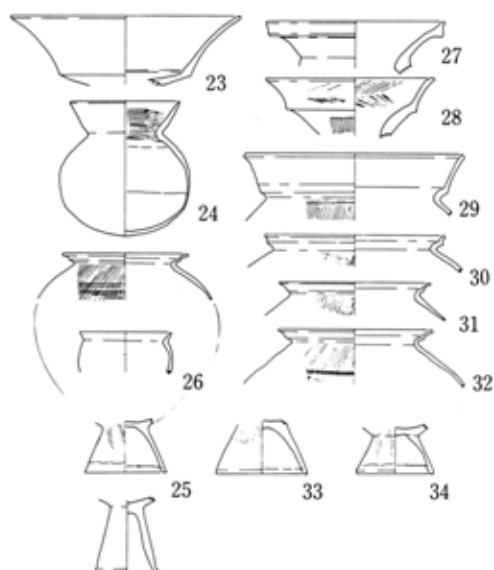
第42図 廻間Ⅲ式3段階(1:8)

(塔の越遺跡 SX01-1~26、SX02-27 定納遺跡-28・29)
(朝日遺跡63B区SB02)

宮之脇遺跡 2号住居



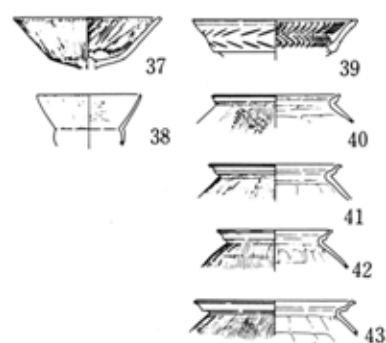
若葉通遺跡 SB02



朝日遺跡



朝日遺跡63B SZ01上層



第43図 廻間Ⅲ式 4段階 (1:8) (37~43は除く)
朝日遺跡35・36『朝日遺跡群第1次調査報告』1975愛知県教育委員会

第5表 技法の消長

期		甕								高杯 A					
		ハ ケ メ				ケズリ				ミ ガ キ		透 孔		口 縁 部 端 面	
		a	b	c ₁	c ₂	a	b	c	d	a	b	a	b	細 斜 面 丸	
I	1														
	2														
	3														
	4														
II	5														
	6														
III	7														
	8														

ハケメ a—ハケメ

b—板状工具

C₁—S字甕用ハケメ密度 3・4 本C₂—S字甕用ハケメ密度 5～7 本

ケズリ a—ケズリ

b—掻壁

ミガキ a—ヘラミガキ

b—幅広・粗雑なミガキ

透孔 a—2 孔 1 組 4 穿孔

b—3 方向 2 段 6 穿孔

第6表 形式の消長

期		甕															高杯											
		A					B					C					A				B				C	A		
		1	2	3	4	5	1	2a	2b	3	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	1	2a	2b	1		2		
I	SB 02																											
	1																											
	2																											
	3																											
	4																											
II	1																											
	2																											
	3																											
	4																											
III	1																											
	2																											

[illegible]

技法について58～61頁参照

器台				壺													鉢											
B				A				B				C					D	E	F	A				B				
1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	5	2	1		1	3	4	6	1a	1b	2	3	4
				■				■	■			■	■								■	■		■	■			
				■				■	■			■	■								■	■		■	■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■				■		■	■										■		■		■			
				■																								

縁をもつ器台B₄が参入する。このような小型器台の多様化とさらに量の増大が2段階の特色といえよう。器種構成比率の上で12%と突如10%の枠を超える。鼓型器台に系譜をおくとされるX型の小型器台が搬入される。

鉢も同様に小型鉢の器種が豊富に見られるようになる。丸底化が基調となり、前段階から見られるミガキC（細いヨコ方向のミガキ）が盛行する。

壺F（二重口縁壺）は、はねあげ口縁が消失し、単純化する。壺E₁は有段口縁技法をもち、徐々に口縁部の外反が強く、また幅が拡大する傾向を示す。羽状文はより強調され単純化する。他の器種にはほとんど文様を施すことが見られないのに比べ、壺E、あるいはFに加飾性が認められる点は注目すべき所である。

3段階 3段階

塔の越遺跡 SX01の良好な一括資料及び岩倉城下層 SX01³⁰⁾により設定する。

甕はS字甕C類新段階が主体を占める。塔の越遺跡ではなく字甕が多く出土し、平底を呈する。外面はハケメが採用されずケズリb（搔壁）が多用される。製作がきわめて粗くはたして本段階を代表する型式であるのか疑問が残る。むしろ精製化する球形体部の丸底甕の出現を重視しておきたい。

高杯A₄は激減し散見できるのみとなる。杯部は著しく浅くなり、脚部は直線化する。高杯B₂は器壁の薄さが消失し、再び厚くなる傾向を示す。脚部はより大きく、杯部から柱状部を残すもののただちに大きく開くものが見られる。

器台はますます多様化し、やや長大化する傾向を示すX型を呈する器台が出現し、器台B₄は口縁部を強くヨコナデし外反させる形状に変化する。またB₂は口縁部の直線化が崩れ、徐々に内彎する形状になる。脚部は全体に大きく外反し、器高の低化が基調となる。

鉢B類は丸底化し、「小型丸底土器」が確実に共伴してくるのも3段階からである。

壺は柳ヶ坪型壺は二重口縁化し、壺E₁からE₂へ変化する。壺Fは口頸部が大きく外反する傾向が見られるようになる。

4段階 4段階

宮之脇遺跡2号住（古相）と若葉通遺跡SB02（新相）をもって代表させ、将来2分割できるであろう。甕はS字甕C類新段階で占められ、口縁部は肥厚し、D類古段階と近似するまでになる。体部のヨコハケは施され器壁の薄さは維持される。肩の張りは弱くやや長胴化する。台部は底径が大きく端部が外反する形状のものも見られる。高杯A₄は器高が低く脚部は大きく直線的に開く、器台はB₄がより口縁部が大きく発達し、ヨコナデによる外反が口縁部付近のみに施される形状となる。脚部の高さも低くなる。ミガキ手法は低調で、省略するものさえ認められる。器台B₂はやや内彎し、比較的大きな口縁部をもち、端部が上方につまみ上げる形状に変化する。

朝日遺跡63B区 SZ01上層³¹⁾の資料はS字甕は口縁端部を肥厚し、明確な面を保有する。またヨコハケは欠損し、器壁は厚くなる。D類古段階の資料である。高杯は畿内系の屈折脚有段高杯となる。松河戸様式の初段階を示す資料と考えてよいであろう。（第43図）

7) 廻間式土器をめぐる問題

併行関係

廻間式土器の併行関係について、まず廻間遺跡の場合を見てみる必要がある。「搬入品」「模倣品」を捜すときわめて少量であるが第44図に示すように約40点を取り出すことができた。

1、2、3、15、25は受口状口縁を有する近江型甕であり、その口縁部の変化の方向は近江型甕
近江地域と同調する動きと理解してよいであろう³²⁾。廻間Ⅰ式をもって消失する甕B(受口系甕)とは口縁部の形状・変化・技法において明確に区分できる。4、5、6及び8、12、16~18、20~27、30~33は畿内系あるいはその影響において生み出されたものとして一括する。4は小型の軽量甕で口縁端部は上方に肥厚し庄内型甕を機械的に模倣した可能性が考えられる(外面調整はハケメ)。5、6は畿内系の高杯で杯部は大きく外反し、脚部は明瞭な屈折部をもち、庄内期の高杯でもより古い様相を留めているものと理解してよいであろう。8、12はタタキ手法をもつ台付甕で、その淵源地は不明である。廻間6~7期にかけて畿内系土器が比較的多く参入する。これはおそらく廻間Ⅲ式にいたる胎動として畿内の土器様式の影響を強く受けはじめたことを表示しているものと考えることができる。16は庄内型甕口縁部で、17、18、22、23、26は所謂「甕C」として廻間遺跡で一括されたものである³³⁾。26の資料は口縁部が内彎し端部は面の延長線上に肥厚するもので、他の資料に比べより新しい形状のものであろう³⁴⁾。6期新相(Ⅱ式4段階)以降のものは寺沢の0式布留形甕³⁵⁾の範疇で理解してよいものである。高杯21はやはり庄内期の畿内に散見できるものであり、壺27は加飾した二重口縁壺である。以上の諸点から6・7期は総じて廻間遺跡3式期の枠内で理解することができるであろう。そしてその早い段階から「布留傾向甕」が極少量ながら認められる点は留意していく必要がある。典型的な庄内型甕・布留型甕ではない甕が搬入の対象となる。

布留傾向

14、19、20、28は杯部に透孔をもつ高杯でその淵源地は不明であるが、一定の量と拡がりを見ることができ、それを東海地域の中で見ることができる。その他9、10、11、13は三河以東の技法を留めるものである。29は鼓型器台。

その他、濃尾平野各地の遺跡での共伴関係を見てゆくと朝日遺跡61D区 SD03³⁶⁾では廻間Ⅰ式2段階を中心とする資料と畿内系の高杯(廻間Ⅰ式³⁷⁾)が共伴する。岩倉城下層SX01で畿内系の有段鉢がS字甕C類新段階と共伴し³⁸⁾、朝日遺跡SK01上層³⁹⁾ではS字甕C類古段階と布留型甕が共伴している。廻間Ⅲ式前半代と布留Ⅰ式(寺沢編年)は大きく重複する見通しがたつてであろう。

畿内との併行関係

次に畿内地域での廻間式土器を概観しておく必要がある。まず布留遺跡山口池Ⅳ層⁴⁰⁾資料の中に廻間Ⅰ式2段階の高杯Aが見られる。美園遺跡DSX-304⁴¹⁾では高杯Aの脚部と推定される資料があり、Ⅰ式4段階に併行するものであろう。崇禅寺遺跡Ⅱ区土器溜⁴²⁾ではS字甕B類中段階・小型器台B₁・小型高杯Cが見られ良好な資料である。廻間Ⅱ式3段階を中心とする。布留遺跡山口池第Ⅲ層においてS字甕B類中段階の資料が出土している。そ

の他平城宮下層 SD6030⁴³⁾では小型高杯C及びS字甕C類新が共伴し、廻間Ⅲ式3段階と併行するであろう。また垂水南遺跡⁴⁴⁾からはS字甕C類新～D類の資料が多く見られ、柳ヶ坪型壺等も散見できる。D10区大溝上層の資料は松河戸様式初相を中心とするようである。

以上を総合すると庄内型甕⁴⁵⁾の時代は廻間Ⅰ式3段階から廻間Ⅱ式までであり、布留型甕の時代は廻間Ⅲ式から松河戸様式にかけてとすることができる。

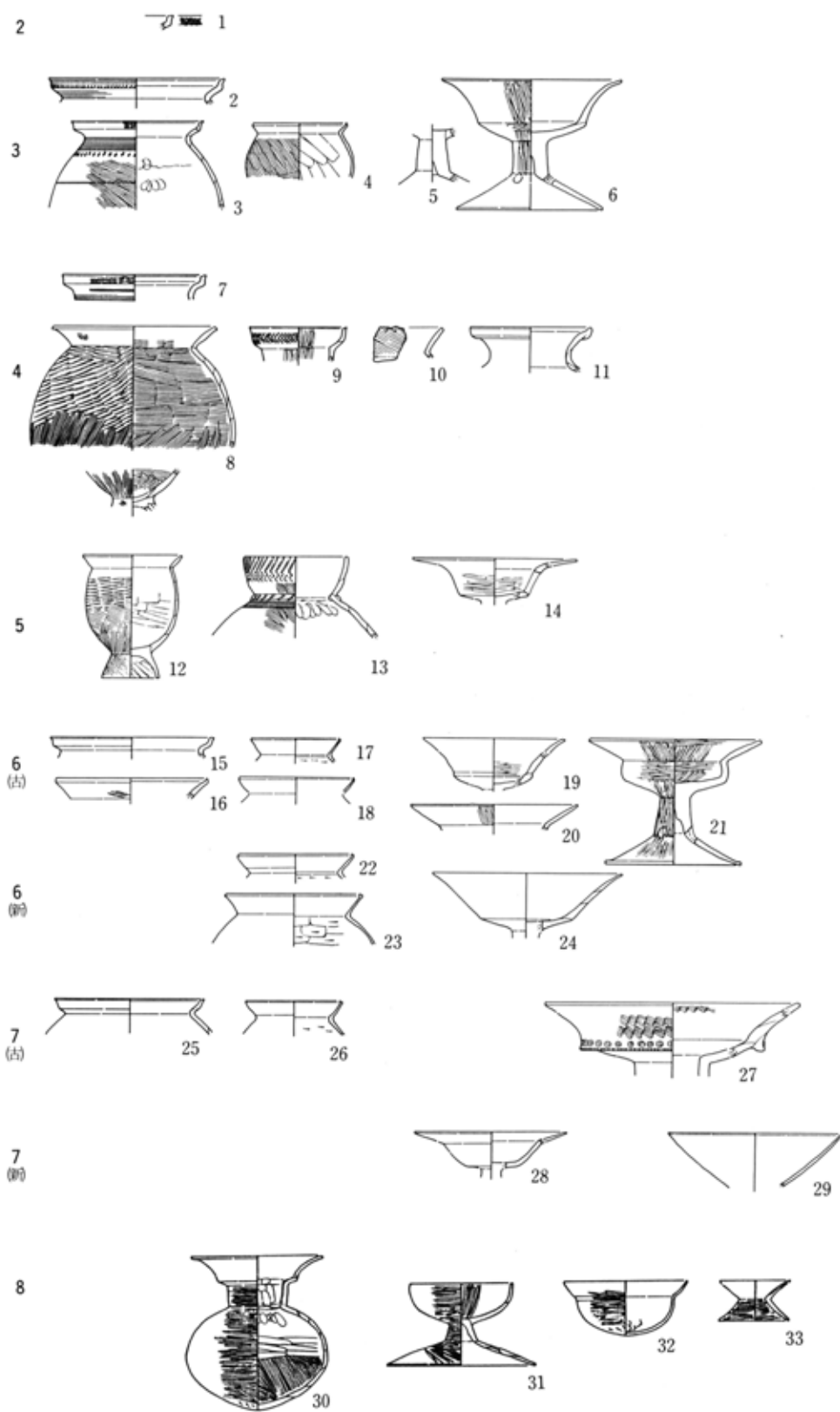
東海各地

伊勢湾をめぐる東海各地域を一つの大様式圏と理解する見方は根づよく存在する。鈴木が見通した「欠山様式の地域性」⁴⁶⁾をはじめ石黒のいう「欠山期土器群の偏差」⁴⁷⁾等が近年提示された代表的なものであろう。これらの考え方には容認できる点もあるものの、器種の系統の変遷の理解に問題が多い。結論を急げば、東海地域をめぐる古式土師器の様式問題はまず濃尾平野低湿地帯の土器様相を中核として組立てられていく必要がある。そして濃尾平野低湿地帯を中心として、濃尾平野全域、及び伊勢湾沿岸地域を含めて一つのまとまりを形作ることができる。それはおよそ廻間様式をもって代表されることができるであろう。その領域は、濃尾平野・知多・伊勢・志摩と「古代幡豆」⁴⁸⁾を含めて考えることができる。したがって近江北部と東三河・西遠江地域はまた別の様式を構築してゆく必要があり、その後に各様式間の関係を明確化していくという手続きが重要であると考えられる。それは例えば器種構成上で最も多くを占める甕をもってしても明らかである。まず、廻間様式ではS字甕の動向が中核をなす。一方北近江（湖北）では受口（状・系）口縁を有する（台付）甕が主体であり、S字甕はあくまで「搬入品」「模倣品」の枠を出ることはなく、少量存在するのみである⁴⁹⁾。東三河・西遠江地域もその主体は広口の台付甕であって、S字甕の受容はC類段階からのようである⁵⁰⁾。なお下伊那地域においても中島式土器における個性的な甕・壺が存在し、ある程度孤立した様式が認められるのである。以上のごとく小地域単位で独自の様式が設定されるのであり、その上で共通する、近似する形式を受容しながらたがいに交流が行われる。したがって、それぞれの地域性をまずは強調しつつ、相互の関係・影響の仕方を改めて取り扱っていくことが必要であろう。

さてここで伊勢湾沿岸地域（廻間様式圏内）における良好な資料を追加しておきたい。西三河地域では高木遺跡第1号方形周溝墓⁵¹⁾出土品は廻間Ⅰ式1段階を中心とするものであり、山王遺跡出土品⁵²⁾はⅠ式2段階の特色を留めている。中狭間遺跡溝状遺構⁵³⁾はⅠ式4段階の良好な資料と考えられる。S字甕A類新を含み、小型高杯・ヒサゴ壺・バレス壺等器種も豊富で北陸系の有段甕等と共伴する。なお東三河地域の欠山遺跡第2貝塚溝状遺構出土資料⁵⁴⁾は、その主体をⅠ式3段階におくものと考えてよいであろう。

伊勢地域では、まず草山遺跡 SB38上層・SX114⁵⁵⁾が総じてⅠ式1段階の資料であり、中楽山遺跡 SB1⁵⁶⁾がこれに続くⅠ式2段階、中楽山遺跡 SX1⁵⁷⁾及び地藏僧遺跡 S B26⁵⁸⁾はⅠ式4段階に所属するであろう。お畑遺跡 SK1⁵⁹⁾は廻間Ⅲ式2・3段階に主体をおくものである。

廻間様式圏



第44図 搬入・模倣品 (1:8)

土器の移動

古墳時代初頭の土器とした廻間式土器について、他地域への搬入の仕方を概観しておく必要がある。その前に確認しておかねばならない点は受容された土器の問題である。系譜上は外来系土器（53頁）に所属するもののその実体は「搬入品」「模倣品」と異なりきわめて在地的色彩が強く認められるものであり、土器の定着の過程に新解釈が加えられた在来系土器の一面をもつものである。その受容結果から5つの形態を抽出することができる。まったく新しい形式を他地域の土器から「借用」する場合、従来存在する形式の器種を外来の土器と代替える、「置換」。その器種を新たに追加する「付加」。2種類以上の要素が一体化する「融合」。受容を「拒否」する場合。廻間式土器ではⅠ式期の鉢A₃は本来的には近江地方からの器種の「借用」。甕Bは「融合」。Ⅲ式期の壺F・E₂は畿内系との「融合」。松河戸様式への高杯の変化は「置換」型。なお畿内系の甕は「拒否」されることになる。

濃尾平野の土器を代表するS字甕の分布を中心にその搬入経路を復原することからはじめたい。特にS字甕A類の分布を手掛りにし、その形状・技法から「搬入品」「模倣品」を重視しておく。第45図に示したものが管見による資料である。A類の分布はこの図から見て明らかのようにその中心は濃尾平野低地部にある⁶⁰⁾。

〈近畿道〉

土器の移動 搬入経路は今の所、伊勢を通り伊賀そして奈良盆地へ入り、その後大和川を下りかつて大阪に存在した「河内湖」に入る。やがて最大の重要拠点、西摂地域の淀川河口部の遺跡群に到達する⁶¹⁾。その後、瀬戸内へ向かうと言う主要経路が推定されよう。近畿地域においてまとまったS字甕A類の出土が見られる遺跡は、現状においても纏向遺跡のみである。しかしその後のB・C類を含めて考えてみると、まず宇陀地方の野山遺跡⁶²⁾が知られる。廻間式土器の多くの器種が散見でき興味深い遺跡である。また搬入経路を考える上でも重要な位置を占める。摂津では垂水南遺跡・崇禅寺遺跡が代表的で比較的まとまった資料が見られる。纏向遺跡を中心に北上すれば、布留遺跡・平城宮下層資料が存在し、南下し紀伊地方では鳴神地区遺跡⁶³⁾等でS字甕が報告されている。纏向遺跡と北摂地域を結ぶ経路上に今後廻間式土器の増加が保証されるであろう。ところで今一つ留意しておく経路がある。それは伊賀より木津川・淀川を下るコースである。南山背の状況はやや不安定であるが、芝ヶ原古墳からはS字甕B類⁶⁴⁾及び、伊勢湾の影響が残る壺等の出土が報告されている。

土器そのものの状況としては多量の搬入品、模倣品により構成され、また器種のほとんど全てが搬入の対象と考えることができる。S字甕・パレス壺・ヒサゴ壺という特色のある器種の他に、器台・く字甕・碗形高杯・小型高杯等が見られる。崇禅寺遺跡ではS字甕の他小型高杯・小型器台が存在し⁶⁵⁾、纏向遺跡では東田南溝中層を中心にS字甕A・B類、高杯A、器台、内彎口縁壺、ヒサゴ壺がみられる⁶⁶⁾。S字甕以外の器種をも同様に搬入されていく姿を垣間見ることができる。その時期は廻間Ⅱ式期と考えて良いようであり、寺沢編年庄内Ⅱ式期を中心に廻間式土器が多く畿内へ参入し、以降布留式期にいたる間、ほぼ継続的に土器が搬入されると推測できる。（99頁参照）

以上まとめると、近畿道へは伊勢を経由して交流が廻間Ⅱ式期前半（寺沢編年庄内2式期）に本格的に開始され、その多くは搬入品・模倣品で占められる。受容され定着を志向する形式はほとんど見られない。多量の搬入品は直接的な人の動きを強く主調する要因となるであろう。

〈北陸道〉

関ヶ原の狭い谷間をぬけ滋賀県湖北地方から北陸地方へ向かう経路が基本である。

北陸地域では報告例が増加している石川県北加賀を中心に見てみると、S字甕A類は2遺跡で認められる。その他B類古を含めると、田嶋明人による漆町編年⁶⁷⁾による漆5群土器 漆5群土器の中にこれらの土器の多くが含まれることになる。金沢市近岡ナカシマ2号溝上層ではA類新（小型品）が、松寺遺跡B2号土坑ではS字甕B類古、南新保D遺跡P-54出土のバレス壺は廻間遺跡の壺A₄類に相当する⁶⁸⁾。これらは総じて廻間5期（Ⅱ式1～2段階）の資料とすることができる。漆5群と廻間5期はほぼ併行すると理解してよいであろう。

器種についても多くの種類が散見でき、「白江式の段階に波及してくる外来系土器ないしはその影響を受けたものは、その種類、量ともに多い」⁶⁹⁾という田嶋の指摘があるようにこの時期の土器の交流は注目する必要がある。S字甕、受口系甕は客体でありその主体は搬入品・模倣品であろう。く字甕は漆町「甕G」を中心に影響を与えたのではないかと思われるが、台付甕の有無を考慮すると不安が残る（付加あるいは融合）。高杯及び器台はその多くを「東海系」として考えることができ、その淵源地を廻間様式にあてることが可能かと思われる。高杯は置換、器台は借用現象であろう。またバレス壺も受容され独自の変化を遂げる（融合）。以上白江式期を中心にその多くの器種が参入し、廻間様式と密接な関係を留めている。そして漆7・8群土器以降、畿内系の土器が主体を占める段階までその状況は残存するようである。

湖北地方の状況はやや不鮮明ではあるが、S字甕A類が多々散見するもそれはあくまで客体としてであり、量的にも少量に留まる。しかしながら高杯・器台はきわめて類似しており、濃尾平野との関係が明白である。長浜市十里町遺跡1号方形周溝墓⁷⁰⁾出土品（模倣品）はほぼ廻間Ⅰ式2段階を中心とする資料をもって構成されている。山中様式から連続する受口系甕・鉢の濃尾地域での受容を考慮すれば、他の地域より逸早く、互いに器種を互換しあう状況が存在しているようである。

〈東山道〉

東山道に沿って関東北部（毛野地域）地域にいたる路は、最も重要なルートとして位置づけられる。S字甕A類はこのルート上に点在し、また後続するB類も散見できる。

まず伊那谷であるが、下伊那地方は飯田市恒川遺跡⁷¹⁾、上郷町高松原遺跡⁷²⁾でA類新が出土しており、その他小型高杯・バレス壺・ヒサゴ壺・高杯A等多くの器種が見られる。酒屋前遺跡7号住居⁷³⁾から廻間Ⅰ式1段階の鉢・器台が出土し、在来系土器群と共伴する。これらの資料が座光寺原式から中島式土器への変換期にあたるものだとすれば⁷⁴⁾廻間式土器の成立と微妙に同調する現象であるのかもしれない。恒川遺跡GBO16号住居⁷⁵⁾が廻間Ⅱ

漆5群土器

中島式土器

式前半期と併行する資料であり、恒川Ⅶ・Ⅷ期は廻間Ⅲ式期と考えることができるようである。16号住居以降「東海系」高杯・壺・器台類が受容され定着する。甕はく字甕が融合する可能性を残すものの他の器種は大旨借用現象と考えることができる地域である。

塩尻市上木戸遺跡⁷⁶⁾では外来系土器群の約8割を「濃尾平野系土器」によって占められる状況が報告されている。上木戸遺跡2号溝の資料は廻間Ⅰ式4段階に併行するきわめて重要な資料である。甲斐地域では韮崎市でS字甕A類が出土し⁷⁷⁾、その初源においては諏訪を経由した交流を想定できよう。ところで甲斐では京原式期になるとS字甕を含めた「東海系土器群」が受容される」という指摘⁷⁸⁾がある。これらは廻間Ⅲ式期に見られる東海道の動向と関連づけて考えることができるのであり、Ⅱ式期初頭の土器の動きとは一応区別しておく必要があろう。

毛野地域ではS字甕・器台・高杯・壺等多くの器種が「東海系土器」に変化するようだが、その多くはS字甕の変化⁷⁹⁾に特色づけられるように独自の変遷を示すものである。(受容土器)したがって問題はその影響をうけた段階の資料といえよう。高崎市熊野堂遺跡の9号住居⁸⁰⁾に見られる小型器台・高杯・パレス壺・ヒサゴ壺・台付甕は廻間Ⅱ式前半期の特色を残すものであり、これらが当地域への交流の初期の在り方を留めたものであるとすれば、廻間Ⅱ式期の早い段階にはすでに東山道ルートを経由して北関東の一部に廻間様式は波及していたと理解してよいであろう。

〈東海道〉

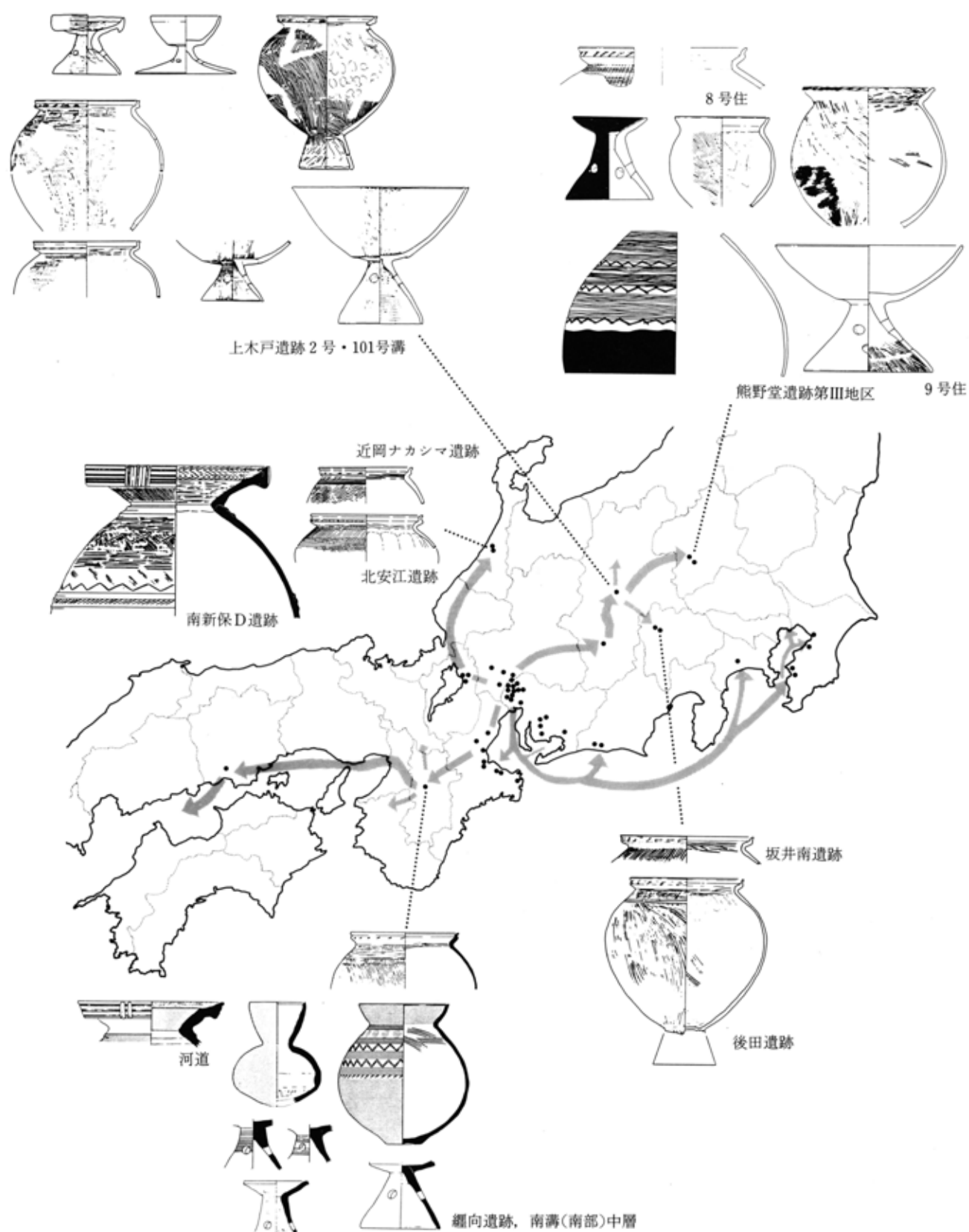
海上ルートを主要な経路とすべきである。まず注目される地域は上総地域である。S字甕A類が近年増加しつつあり、廻間Ⅰ式段階での交流が想定できる。その分布の中心は木更津・君津・富津にかけての地区と考えられる⁸¹⁾。また同様に神奈川県相模川流域においても比田井⁸²⁾が指摘するように山中期からの交流があり、廻間Ⅰ式期においても同様な状況を見せつつある。しかしこれらの地域には土器型式としての定着は見られず、一部の器種(高杯を中心)の借用付加現象が認められるにすぎない。また「東海系土器」は畿内系土器を伴った搬入品・模倣品が主体を占めるようである⁸³⁾。東海道沿線に廻間式土器が多量に

大廓式土器

しかも決定的に影響をあたえるのは駿河「大廓式土器」の段階を⁸⁴⁾またねばならない。その嚆矢は千代南原遺跡1号土坑の資料にある⁸⁵⁾。一括資料の中で外来系土器の多くを廻間式土器に淵源をもとめることが可能な器種によって構成されている。その特色から廻間Ⅱ式後半代に中心を置くものと考えられる。以降S字甕・高杯は独自な変化を遂げ、碗形高杯も借用し定着する。壺においては個性的であり、独自の形態の創出が見られる。これらは器種の拡がりの中心を廻間Ⅲ式期に置くきわめて重要な土器様式と評価したい。

以上各地域の動向を概観してきたが、ここで総括しておきたい。

近畿道では廻間Ⅱ式期をもって廻間式土器が搬入・模倣されはじめる。北陸道ではやはりⅡ式期をもって交流し、高杯・器台は受容され定着する。東山道ではⅡ式期にすでに毛野地域へ搬入され、と同時に様式を構成する器種の多くが受容され定着する。一方東海道では廻間Ⅰ式期にすでに相模・上総と交渉が見られる。しかしながら遠江・駿河・西相模



第45図 S字甕A類の分布

第1次拡散に広く廻間様式が影響を与えはじめるのはⅡ式期後半代であり、Ⅲ式期にいたり広く定着する。廻間式土器の動きはⅡ式期初頭に最大の画期が見られ、その後Ⅱ式期末～Ⅲ式期前半に再び拡散が開始される。前者を第1次拡散期、後者を第2次拡散期としておくことにしよう⁸⁶⁾。

第7表 編年対照表

廻間遺跡	濃尾平野		濃尾平野 基準資料	尾張		畿内		北陸	
	赤塚			宮腰		石野・関川	寺沢	田嶋	
1			瑞穂4次SB02 高蔵C区第3層	欠山	3				
2	廻間Ⅰ式	1	仁所野2号 高蔵D区1層		4	纏向1	庄内0	月影	漆町3
3		2	能田旭講 朝日L区SZ01						
4		3	勝川 SZ22 廻間 SK51						
4	式	4	廻間 SK50			纏向2	庄内1	漆4	
5	廻間Ⅱ式	1	廻間 SB59 平松 SK01	元屋敷(古)	5				纏向3
6		2	廻間 SZ02			庄内3			
7	廻間Ⅲ式	3	廻間 SB60		6	纏向4	布留0	漆7	
8		4	廻間 SK30						
		1	廻間 SB06 廻間 SB45上層	元屋敷(中)					7
	2	廻間 SB12上層 廻間 SB56	8						
	3	塔の越 SX01 岩倉城下層 SX01					布留2	漆9	
	4	宮脇2号住 若葉通 SB02							

尾張一宮腰健司 1987「尾張における欠山式土器とその前後」『欠山式土器とその前後：研究・報告編』

畿内一関川尚功 1976「畿内地方の古式土師器」『纏向』

寺沢 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』

北陸一田嶋明人 1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』

〔注〕

- 1) 大参義一1968「弥生時代から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』X LV 11
- 2) 受口系甕との区分が不明瞭であるが大参分類のa類とは基本的に本論のS字甕A類を意味するようである。
- 3) 紅村 弘1975・1976「入門講座弥生土器・東海西部」『考古学ジャーナル』112、116、122、125
加納俊介・都築みどり1984「愛知県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
加納俊介1986「東海地方」『シンポジウム“月影式”土器について報告編』石川考古学研究会シンポジウム実行委員会
- 4) 飯尾恭之1973「尾張における後期弥生式土器の編年的研究（Ⅰ）」『古代人』27、28合
杉浦仁美1982「名古屋台地欠山期についての一試論」『南山考古』1
- 5) 小林達雄1975「タイポロジー」『日本の旧石器文化』1
- 6) 集団表象 注5)と同じ。
- 7) 寺沢 薫1980「大和におけるいわゆる第五様式土器の細別と二・三の問題」『六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書第34集
- 8) 川添 登1977『デザインとは何か』角川選書41
- 9) 川添 登1985「生活の母胎としての都市」『日本民俗文化大系11』
- 10) 加納俊介1987「用語に関する2・3の問題」『欠山式土器とその前後、研究・報告編』
- 11) 模倣には外形のみを形作る（機械的模倣）ものと、意味（製作手順）を理解して行うもの（洞察的模倣）の2者がある。後者はその後在地的発展をする可能性があるが、前者にはそれが見られない。
- 12) 近江型甕の特色である受口状口縁に淵源を求めるものの、その形状・変化の方向・台付甕等に明確な違いが見られる。この種の台付甕を受口系甕と一括し仮称する。湖北・西濃地方の甕の研究が進めば再検討が必要となろう。
- 13) 以前「屈曲部調整」として報告した。屈曲部は複数存在し、やや煩雑であるため、「頸部」という一般用語を採用した。
赤塚次郎1986「S字甕覚書」85『年報 昭和60年度』（愛知県埋蔵文化財センター）
- 14) 森勇一氏御教示。なお施文法は刺突というより弧状押引であるという指摘をいただいた。
- 15) 貝殻刺突による連弧文が向かい合うように施される場合が多い。なおI式期前半には不連続波線文が用いられるものがあり、連弧文への定着はI式期後半の可能性が高い。
- 16) 高杯A_{1a}は廻間様式直前に誕生する内彎高杯であり（淵源地不明、伊勢か？）、A_{1b}は山中様式通有の高杯から系統的に変化するもので、A_{1b}とA_{1a}が融合することにより高杯A₂が生み出されると仮定しておく。資料の増加をまちたい。
- 17) バレス壺を取り扱った論考としては浅井和宏1987「バレス・スタイル壺小考」『マージナル』No. 7がある。ここで注目したE類（文様区分）とは廻間I・II式期全てを含むことになる。
- 18) 北村和宏1988「柳ヶ坪型壺について」『古代』86号 北村分類のA・B類がここでいうE₁、C・D類をE₂にはほぼ比定できよう。なお柳ヶ坪型壺の下限はおそらく松河戸様式前半まで残存するであろう。
- 19) その他底部の木葉痕（注18）、胎土、色調においてE₁は赤褐色を呈し、シャモットを含むものが多く、E₂は褐色を呈する場合が多い。
- 20) 日野幸治1988『塔の越遺跡発掘調査報告書』（Ⅱ）塔の越遺跡発掘調査団
- 21) 伊藤厚史『若葉通遺跡発掘調査の概要』名古屋市教育委員会1989 報告書掲載品以外に良好な資料が見られる。伊藤氏御教示
- 22) 赤塚次郎1989「東海」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第I分冊 第25回埋蔵文化財研究集会
- 23) 伊藤秋男・水口富夫1985『高蔵貝塚Ⅱ 人類学博物館紀要 第7号』
- 24) 服部哲也他1987『瑞穂遺跡 第4次調査の概要』名古屋市教育委員会
- 25) 宮川芳照1983『仁所野遺跡』大口町埋蔵文化財調査報告書第4集
- 26) 注23)と同じ。
- 27) 市橋芳則1987『能田旭遺跡』師勝町埋蔵文化財分布調査概要1

- 28) 丹羽博他1987「朝日遺跡」『年報 昭和61年度』 勸愛知県埋蔵文化財センター
- 29) 赤塚次郎他1984「勝川」愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査報告書第1集
- 30) 服部信博1990「岩倉城遺跡下層出土の古墳時代前半期の遺構と遺物」『年報 平成元年度』 勸愛知県埋蔵文化財センター
- 31) 石黒立人他1989「朝日遺跡」『年報 昭和63年度』 勸愛知県埋蔵文化財センター
- 32) 神谷友和氏御教示。
- 33) 関川尚功1979「廻間遺跡の古式土師器」『廻間』
- 34) 端部を丸く肥厚させる資料は存在しない。内面のケズリは全体に屈曲部まで施され、明瞭な稜を留める資料が多い。
- 35) 寺沢 薫1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第49冊
- 36) 宮腰健司1988「朝日遺跡出土の外來系土器について2」『年報 昭和62年度』 勸愛知県埋蔵文化財センター
- 37) 関川尚功氏御教示
- 38) 注30) に同じ。
- 39) 宮腰健司1988「朝日遺跡」『年報 昭和62年度』 勸愛知県埋蔵文化財センター
- 40) 置田雅昭1975「大和における古式土師器の実態」『古代文化』第26巻2号 山口他IV層(第3図—9) III層(第4図—11・12)
置田雅昭1988「古式土師器研究」『天理大学学報』第157輯
- 41) 渡辺昌宏・井藤暁子他1984『美園』大阪文化財センター(第291図—D261)
- 42) 大野薫他1983「崇禪寺遺跡発掘調査概要・I」大阪府教育委員会
- 43) 奈良国立文化財研究所1981「平城宮発掘調査報告X」
- 44) 米田文考1983「搬入された土器—摂津・垂水南遺跡を中心として—」『考古学論叢』関西大学
- 45) 井上和人1983「布留式土器の再検討」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集文化財論叢』
- 46) 鈴木敏則1987「欠山様式とその前後—西遠型」『欠山式土器とその前後 研究・報告編』
- 47) 石黒立人1988「伊勢湾地方と琵琶湖地方、あるいは東西の結節点」『古代』86号。
- 48) 知多半島南端・島嶼部・渥美半島先端・西三河南部。つまり知多湾を巡る沿岸部を古代「ハズ」の領域とすることができる。
- 49) 湖北地方の動向については神谷友和氏・古川 登氏に御教示を賜った。
- 50) 広く定着する段階は廻間III式期であろう。
- 51) 川崎みどり1986「西三河」『欠山式土器とその前後』
- 52) 注51) に同じ。
- 53) 注51) に同じ。
- 54) 小林久彦・賛元洋1986「東三河」『欠山式土器とその前後』
- 55) 松阪市教育委員会1982・83「草山遺跡発掘調査月報」Na2、Na5
- 56) 三重県教育委員会1973「中楽山遺跡」『昭和47年度県営園地整備事業地域埋蔵文化財調査報告』
- 57) 注56) に同じ。
- 58) 亀山市教育委員会1978「地藏僧遺跡発掘調査報告」
- 59) 鳥羽市教育委員会1972「おばたけ遺跡発掘調査報告」第4次
- 60) 現状では一宮市域から稲沢市、そして海部郡に広く分布する。特に津島市周辺から稲沢市にいたる日光川水系は注目される。
- 61) 西摂平野には垂井南遺跡・崇禪寺遺跡等S字甕を中心とする「東海系土器」の出土が指摘されている。注44) と同じ。
- 62) 奈良県立橿原考古学研究所1987「宇陀地方の遺跡調査」『奈良県遺跡調査概報1986年度』
- 63) 河内一浩氏御教示。
- 64) 近藤義行他1987「芝ヶ原古墳」城陽市埋蔵文化財調査報告書第16集

- 65) 注42)と同じ。35頁第16図162、173。
- 66) 石野博信・関川尚功1976『廻向』
- 67) 田嶋明人1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』
- 68) 石川考古学研究会シンポジウム実行委員会1986『シンポジウム“月影式”土器について』
- 69) 注67)と同じ。
- 70) 森口訓男1988「十里町遺跡」『十里遺跡・鴨田遺跡調査』長洗市埋蔵文化財調査資料第4集
- 71) 小林正春他1986『恒川遺跡群』飯田市教育委員会
- 72) 佐藤勉信他1984『高松原Ⅱ』上郷町教育委員会
- 73) 岡田正彦1972「酒屋前遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—飯田市内その2』長野県教育委員会
- 74) 山下誠一1986「弥生時代後期から古墳時代前期」『恒川遺跡群』飯田市教育委員会
- 75) 注71)と同じ。
- 76) 宇賀神誠司1988「(上木戸遺跡)弥生後期後半の土器について」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』御長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書2
- 77) 山下孝司1989『後田遺跡』荊崎市教育委員会
山下孝司1988『坂井南』荊崎市教育委員会
- 78) 中山誠二1986「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」『山梨考古学論集Ⅰ』
- 79) 田口一郎1981「S字状口縁台付甕の分類と編年」『元島名将軍塚古墳』高崎市文化財調査報告書第22集
- 80) 御群馬県埋蔵文化財調査事業団1984『熊野堂遺跡第Ⅲ地区・雨壺遺跡』
- 81) 野口行雄1988『蓮華寺遺跡』御君津郡市文化財センター発掘調査報告書第36集
- 82) 比田井克仁1985「外来土器の展開—古墳時代前期の東京を中心として」『古代』第78、79合併号
- 83) 例えば千葉県神門古墳群出土遺物。田中新史御教示。
白井久美子1981「市原市上総国分寺台出土の東海系『有段口縁甕形土器について』」『古代』71号
- 84) 加納俊介1981「出土土器の編年的位置」『月の輪遺跡』
湯川悦夫・加納俊介1972「南関東出土の東海系土器とその問題」『小田原考古学研究会会報5』
- 85) 立花 実1987「古墳時代前期の土器」『千代南原遺跡第Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第22集
- 86) 第2次拡散期は寺沢が提唱する布留O式土器の拡散と同調するものと思われる。
寺沢 薫1987「布留O式土器拡散論」『考古学と地域文化』

付記 本論を執筆するにあたり多くの方々へ御教示を賜った。また資料の実見に際し数々の御配慮を頂いた。記して感謝の意を表します。

田口一郎・石塚久則・白井久美子・岩崎卓也・杉山晋作・田中新史・松本完・車崎正彦・立花実・諏訪訪問順・大島慎一・田嶋明人・栃木英道・北野博司・出越茂和・小林正春・山下誠一・中山誠二・山下孝司・比田井克仁・鈴木敏則・中嶋郁夫・伊勢野久好・古川 登・関川尚功・寺沢 薫・豊岡卓之・大野 薫・小山田宏一・瀬和夫・米田敏幸・島崎 東・増田安生・平野吾郎・山田成洋・置田雅昭・小森紀男・古谷 毅・藪下 浩・笹澤 浩・吉田正人・宮腰健司・石黒立人・伊藤厚史・服部哲也・北村和宏・市橋芳則・日野幸治・川崎みどり・賛元 洋・岩野見司・加納俊介・江崎 武・神谷友和・種浦 修・蒲原宏行・丹羽 博・狐塚省蔵・小川貴司・青木一男・伊丹 徹・望月幹夫・立木 修・森 毅

(順不同、敬称略)

なお、S字甕の胎土及び石製品の材質について永草康次氏に御教示を賜った。